

平成19年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学FD委員会

はじめに

本学において FD 活動が組織的に始められてから 10 年目を迎えようとしています。大学 FD 委員会は正式に発足してから 5 年が経ちました。国レベルでの FD の義務化に伴い、平成 19 年度には大学院 FD 委員会を設置されました。

幸い本学には「教育」を重視する伝統があり、教育を教員の最優先職務とする共通理解が確立しています。本学の理念である「全人教育」の遂行には、私たち教員の修養と絶えざる努力が不可欠であることも理解されているところです。組織的にもこのことを教員評価に積極的に反映させ、努力を支援するようになってきています。

本学の FD 活動には大別して、大学全体で計画実行するものと、各学部が学部単位で計画実行するものがあります。大学教員の共同体としての基本単位が学科であり、教育・研究領域のまとまりが学部ですので、全学としての統一と調整を図りながらも、学部・学科のイニシアティブを尊重することが FD 活動を実効あるものとすることができると考えます。その意味で、本報告書に記されているように、各学部の独自の FD 活動が展開されてきていることは喜ばしいことだと思われます。

大学教育の潮流の一つは、学習者としての学生を中心に据えた教育であり学習結果を重視する教育にあります。しかも、その教育の方向は、固定化された知識の授受ではなく、ダイナミックな知識の構築および学習意欲と思考能力の発展的伸長にあります。当然ながら FD 活動もこの潮流に焦点を当てたものになるでしょう。

FD 活動は教育活動と共にあります。したがって、同僚教員と協力してカリキュラムを改善し、教材を開発し、授業やその他の教育活動を計画、実施、そして評価するような活動は FD 活動としても高く評価できるものです。一人一人の教員が孤立することなく、協働して学生の学習を指導し援助する中に、FD の精神が活かされていくものと思われます。大学組織としてもそのような環境を整え、風土を醸成する努力を続けたいと思います。

大学 FD 委員会委員長
教学部長 高橋 靖直

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画及び課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	3
(6) 今後に向けて	4
2. 学部の活動.....	5

II 教員研修

1. プレゼンテーション研修会	
(1) 実施の概要	23
(2) 研修プログラム内容	23
(3) 実施の状況	24
(4) 実施後のアンケートから	24
(5) ディスカッションの実施	27
(6) 実施の成果	35
(7) 平成 19 年度プレゼンテーション研修会参加者一覧	36
2. 新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	37
(2) 実施の成果	39
3. Blackboard@Tamagawa の活用	
(1) 活用事例報告	40
4. 大学 FD 研修に関する調査	
(1) 調査について	50
(2) 調査内容	50
(3) 大学 FD 研修に関する調査 まとめ	51
(4) 自由記述部分のコメント	53

III コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要	56
2. 集計結果及び公表	56

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事要旨	71
2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙	81
3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙	82
4. 玉川大学 FD 委員会規程.....	83

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

- ① 玉川の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員の育成。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	高橋靖直
委員	文学部	茅島路子
委員	農学部	河野均
委員	工学部	山田博三
委員	経営学部	高千穂安長
委員	教育学部	金井茂夫
委員	芸術学部	加藤悦子
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	コア・FYE教育センター	菊池重雄
委員	研修センター	江里口 歡人
アドバイザー	学術研究所	切田 節子
事務担当	教 学 部	茂村 恭 司
事務担当	教育企画部	大野 太 郎
事務担当	コア・FYE教育センター	山崎 千 鶴
事務担当	研修センター	柳原 達 宏

(3) 今年度の活動計画及び課題（平成 18 年度報告書「今後に向けて」より再掲）

- ・大学 FD 研修アンケートをもとに開催を図る。
- ・新任教員研修会を継続実施する。
- ・プレゼンテーション研修会を複数回の開催を図る。
- ・教員相互の授業参観及び研究会の開催を推進する。

(4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。研修会については、今年度で一年次教育の全学実施から3年目となるが、引き続き「一年次セミナー」担当者研修会等を数多く開催した。特に、今年度より使用している新たな教科書『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』の指導法にあたっては、担当者の希望を受け、複数回の担当者対象研修会を開催することができた。

また、学内教職員の意識を高めるための学外講師による講演会の開催やFD活動調査のため他大学に訪問調査を実施した。

コア科目の「学生による授業評価」は当初の計画どおり今年度も、春・秋学期とも全学的に実施した。平成14年度から継続して行っているプレゼンテーション研修会は本年度も3回開催し、合計23名（初年度からの延べ受講者数は203名、平成19年5月1日時点の在職者で受講した累積数は184名、全専任教員の67.6%）の教員が参加した。

なお、大学FD委員会は3回の開催であったが、詳細として巻末に参考資料（議事要旨）を掲載した。

<平成19年度>

6月5日	第1回大学FD委員会
6月27日	特別講演会「“全入時代”における玉川大学の評価」（学校法人河合塾教育研究部教育研究東京チームチーフ 神戸 悟氏）
7月9～12日	「一年次教育国際会議（アメリカ合衆国ハワイ州）」教員派遣
7月16～28日	コア科目（春学期）「学生による授業評価」アンケート実施
7月26～30日	「日米教員養成（JUSTEC）アメリカ合衆国ハワイ州」教員派遣
8月1・2日	平成19年度第1回プレゼンテーション研修会
8月10～9月11日	教育研修「大学における授業の評価法の研究」のためイギリス・エジンバラ大学教員派遣
9月5日	立命館大学へ教職員訪問調査
9月11・12日	平成19年度第2回プレゼンテーション研修会
9月14日	コア科目担当者研修会
9月21日	「一年次セミナー101/102」担当者研修会「ディベートの指導法」
11月30日	平成19年度教育改革事務部門管理者会議教職員派遣
12月1・2日	大学教育学会2007年度課題研究集会「学士課程教育の再考」職員派遣
12月8日	大学高等教育研究センター「2007年度第2回FDセミナー」教職員派遣
12月12日	講演会「新入生を大学にいかに適応させるか——新入生オリエンテーションの展開を中心に」（米国ジョージア大学前副学長・学生支援担当 リチャード・マレンドア氏）
12月13日	国際基督教大学教職員訪問調査
12月14・18・20日	コア科目担当者研修会「授業シラバス作成」（3日間とも同内容）
12月17日	第2回大学FD委員会
1月15～29日	コア科目（秋学期）「学生による授業評価」アンケート実施

1月16日	「一年次セミナー101/102 教育」講演会「一年次教育における授業方法について」(米国サウスカロライナ大学附属一年次教育研究機関 [NRC] ディレクター メアリー・スチュアート・ハンター氏)
1月25日	私学経営研究会講座「教員評価制度運用の現状と課題」教職員派遣
1月30・31日	平成19年度第3回プレゼンテーション研修会
2月20・21日	平成20年度採用の新任教員研修会
3月8・9日	大学コンソーシアム京都「第13回FDフォーラム」教職員派遣
3月11日	第3回大学FD委員会
3月19日	平成20年度「一年次セミナー101/102」新規担当者研修会「玉川大学の一年次教育について」講演、授業方法事例報告等
3月31日	平成20年度「一年次セミナー」担当者研修会「答えを見つけさせる授業方法」「成績評価について」

(5) 活動の成果

本年FD研修会をより充実するために「大学FD研修に関する調査」を1月に実施した。これは、大学側からの一方的な押し付け研修会ではなく、個々の教員が今何を求めているのか、何を感じ必要・希望しているのかを把握し、それに答える研修会を実施するためにアンケートを実施した。調査内容は、「大学FD研修の内容として、どれが必要であると考えるか」との問いに対して、「授業に関する事項」「教育関連の法規に関する事項」等4つのカテゴリーに分けて実施し、298名中175名(58.7%)の回答があり、今後このアンケート結果を基に研修会を開催する。

プレゼンテーション研修会は、実施後のアンケート調査によると「有用性」についての回答が一番多く、「自分の改善点がわかった」というコメントが多く、これはビデオで自分の姿を客観的に見られたことによる効果で、「改善された」「まだ改善されていないが、改善しようと思った」と改善点に関するコメントが目立ち、プレゼンテーションに対する意識の向上が見られた。また、ディスカッションについてもコメントが多く、学部・学科の垣根を越えて本音で話し合い、単にコミュニケーションが円滑になったということだけでなく、FDに関する共通理解が図れた。これにより、FD活動について共感しあって築いた人間関係が、各学部・学科を越えて、これからの活動の原動力となると感じた。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度も2回実施し、15年度からで計10回実施したことになる。授業毎の集計結果は各授業担当者にフィードバックしているが、例年通り、全体及び分野集計の平均値を学内のみ対象にホームページで公表した。

新任教員研修会は、開催後のアンケートにおいて、研修内容・資料・講師の説明が「とても充実していた」、あるいは「充実していた」、「教材が解り易かった」、「講師の説明が解り易かった」と概ね100%の回答を得た。また、研修に参加して、「大学の理念、運営組織、教育方法、キャンパスの様子が把握できた」「4月以降の勤務への安心感が得られた(特に、何がわからなければどこに問合せればよいのかがはっきりした)」「4月からの勤務に関する具体的なイメージが描けた」「理想的なこと(建学の精神)と実務的なこととのバランス

がよくとられていると感じた」など感想が寄せられ、本研修会の目的を達成できたと評価できる。

また、『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』という新しい教科書の採用をきっかけに、教員側から研修会開催を希望する声上がり、それに応える形で研修会を開催できたことは特記するに値するであろう。「一年次セミナー」については全学必修科目として到達目標・授業内容は統一されており、教科書も全クラス共通の書籍を使用している。しかし、その指導法については担当者により開きがあることは否めない。その問題点を克服し、教育内容の質の保証を図るため、講演だけではなく、アクティブ・ラーニングをもちいたワークショップも実施し、教育力向上に寄与できたと考える。なお、『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』については「一年次セミナー」における文章作成、読書法、アクティブ・ラーニングのために、本学教員が中心となり、玉川大学出版部より出版している。

(6) 今後に向けて

昨年度の報告書に記載のとおり、今年度も新任教員研修会に加え、プレゼンテーション研修会も本学の研修センターとの共催の形式で開催した。平成 20 年度以降は、前述の研修会に加え、「大学 FD 研修に関する調査」を基に FD 研修会を開催する。内容と開催回数については研修センターと調整を図りながら充実を図りたい。

また、教員相互の授業参観や研究会は、平成 17 年度秋学期から開催し 6 学部中、3 学部。平成 18 年度および 19 年度は 6 学部中、5 学部が実施したが、学科によっては実施できていない現状もあるという結果であったため、平成 20 年度以降は全学部全学科で開催できるよう、さらに啓蒙活動を推進していきたい。

2. 学部の活動

平成 19 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価の実施			学部 研修会	プレゼンテーショ ン研修会へ の参加者数
			実施時期	専任 対象	公表		
文学部	6 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)*1	学外 実施	2 名
農学部	6 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	—	—	3 名
工学部	—	—	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)*2	学外 実施	3 名
経営学部	5 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内外 (Web)	学内 実施	0 名
教育学部	10 名	2 回	春sem終了後 秋sem終了後	全員	—	学外 実施	5 名
芸術学部	5 名	12 回	秋sem終了後	全員 *3	—	—	6 名
リハビリアーツ 学部	5 名	2 回	秋sem終了後	全員	—	学外 実施	4 名
コア科目			春sem終了後 秋sem終了後	全員	学内 (報告書)		

*1:文学部における学生による授業評価の実施は、比較文化学科である。その結果の公表は来年度を予定している。

*2:学外には総括した内容、学内には全てを詳細に Web と紙面で公表している。

*3:受講者 30 名以上の講義科目を対象とした。

各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修会の受講修了状況(平成 19 年度現在)

	19 年度専任教員数 (A)	A の中で受講した人数	割合
文学部	41 名	27 名	65.9%
農学部	50 名	33 名	66.0%
工学部	53 名	31 名	58.5%
経営学部	27 名	22 名	81.5%
教育学部	40 名	30 名	75.0%
芸術学部	41 名	25 名	61.0%
リハビリアーツ学部	20 名	16 名	80.0%
合計	272 名	184 名	67.6%

※専任教員は助手以上で、平成 19 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

■各学部における今後（平成20年度～）の計画等について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動を続ける。(人間学科) ・ 来年度は専攻科目群、特に3年生対象の比較文化セミナーⅠ・Ⅱが始まるため、今後とも、学科会、学科運営委員会、担当教員間などで、FDに努めたい。(比較文化学科) ・ 今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。(文学部全体)
農学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業評価アンケートの継続的实施(新カリキュラム完成年度) ・ 授業評価アンケート項目および実施科目(実験・実習・演習科目等)の検討 ・ Blackboard システムの活用方法の検討と普及 ・ 平成20年度プレゼンテーション研修会への参加 ・ 学力不足の学生に対する対応 ・ 4単位科目の授業運用上の検討、および見直し ・ 大学院FD委員会と協調した教育技能開発の推進 ・ TAの活用法の改善
工学部	<p>平成20年度からの学部改組をISO9001活動と整合性を取りながら進める。即ち改組において「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。</p>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内容・方法に関する研究(継続) ・ 教員研修会の開催(継続) ・ 専門科目共同授業に関する研究(継続) ・ リメディアル教育に関する研究(継続) ・ 一年次教育に関する研究(継続) ・ 学生確保に関する研究(継続) ・ 学部・大学院一貫教育についての研究
教育学部	<p>本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産(知識・方法)の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能(地域貢献、産学官連携、国際交流)などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。</p>

<p>芸術学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に3年次後半からのプログラムを検討する必要がある。 ・ 様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。
<p>リベラル アーツ 学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成20年度より大学設置基準でFDが義務化されることに鑑み、本学部においてもFDへの意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部および教員個々人の「教育力」と資質向上を一層図っていききたい。今後は、これまでのFD活動の成果と問題点を踏まえた上で、学部運営の「PDCAサイクル」の中にFD活動を位置づけ、新学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築することが課題となる。 ・ 学生による授業評価に関しては、現在、全般的に形式化している傾向がある。その実施方法とともに、適切な活用法の検討が今後の課題である。 ・ 教員の教育・研究活動に関する年次報告をより適切な方法で行うべく、一案として、「ティーチングポートフォリオ」(教育業績記録)の形式をとることが現在検討されており、次年度より実施予定である。

§ 文学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

現在、大学を取り巻く環境の大きな変化に伴い、価値観も多様化し、大学へのニーズも多岐にわたるようになった。かかる現状の認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が、文学部および各学科独自の理念や教育目標をいかに実現するかという視点を常に念頭に置きながら職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に活動に参加できるような体制を構築することを目標にしている。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

文学部長、文学部教務主任、および、文学部各学科主任（人間学科、国際言語文化学科・比較文化学科）を交え、各学科合同の FD 委員会を開催している。また各学科では、学科会あるいは運営委員会等の場で FD 活動の企画・運営に関する事項を審議している。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

学生による授業評価の実施、教員間の授業参観、学外研修への参加など、それぞれの活動で成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

人間学科では、各科目の授業形態（講義中心・発表中心・討論中心）・受講者の人数（クラスの規模）・マルチメディアの活用の仕方（Blackboard の活用：教材・宿題・課題呈示などを含む）に応じて、各教員が授業時に講義内容に関する学生の理解の確認を確認テスト、授業のまとめの提出、コメント用紙の提出などによって創意工夫して行っている。これらの学生の学習状況の把握を通して、学生の授業に対する評価を知り、それに対するフィードバックを行っている。

比較文化学科では、学科開講の全科目を対象とし、春・秋両学期末にアンケート調査を行った。アンケート結果は個別に各担当教員にフィードバックし、授業改善に資すると共に、学科運営委員会で全体の集計分析を行い、本学ホームページに掲載する予定である。アンケート結果は主任がすべてに目を通し実情を把握すると同時に、学科運営委員会でも全体的な傾向を検討し、積極的な活用を試みた。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

人間学科では、授業参観という形ではないが、学科・学年指定のいくつかの必修科目を複数の教員が担当する中で相互の授業活動を客観的に捉えることを主体的に行っている。複数の教員が必修科目を担当することで各学生の学習状況をかなり徹底して把握し、教員の教授方法、学習指導などといった授業への取り組みについて授業中の具体的な場면을例に挙げて意見交換を行い、教員それぞれが効果的な教授方法や学習指導を積極的に取り入れている。また、授業の評価基準も複数の教員で検討している。このような活動は、教員相互の授業参観の組織的な取り組みにもつ

ながっていると思われる。

国際言語文化学科・比較文化学科においても、アンケートで評価の高い授業を学科会で発表し、その授業や複数の教員が担当する科目を中心に、互いの授業を参観する機会をうながし、教授方法の客観的把握と改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

プレゼンテーション研修会には文学部から2名が参加した。

人間学科では、京都大学での高等教育研究開発推進センター主催「大学教育研究フォーラム」(3月26日～27日開催)へ6名が参加した。

国際言語文化学科・比較文化学科では、立命館大学で行われた「第13回FDフォーラム」(3月8日～9日)へ4名が参加した。

⑤ その他の取り組み

人間学科では、初めての試みとして一年次セミナーの担当者が授業改善を目的に実践研究として共同で研究を行った。この共同研究の成果を京都大学での高等教育研究開発推進センター主催「大学教育研究フォーラム」(3月26日～27日開催)で発表した。

国際言語文化学科・比較文化学科では、学科運営委員会を設置して学科の授業について学科全体の立場から定例的に検討する一方、個別にも、特に同一シラバスを用いる Intensive English や一年次セミナーなどで担当者は頻繁にミーティングを行い、緊密に連絡を取り合って授業を展開した。

(4) 今後の予定や課題

人間学科では、基本的にはこれまでと同様の枠組みでFD活動を続ける。

比較文化学科では、来年度は専攻科目群、特に3年生対象の比較文化セミナーⅠ・Ⅱが始まるため、今後とも、学科会、学科運営委員会、担当教員間などで、FDに努めたい。

文学部全体としては今後、学内のFD活動の機会をより多く設けるとともに、学外で開催される各種FD研修会への積極的な参加を促したい。そして、大学を取り巻く現状を的確に把握した上で、今後の文学部における教育・研究活動を再検討し、かつ、教員個々人の職能成長に努めたい。

平成19年度のリベラルアーツ学科のFD活動については、リベラルアーツ学部において報告する。

S 農学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

全学 FD 委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに積極的に参加し、また、専任教員および非常勤講師は原則学生による授業評価を行う。これらを通じて、教員の教育技能開発を推進する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

農学部の主任会メンバー、すなわち農学部長（佐々木）、生物資源学科主任（新島）、生物環境システム学科主任（岩坪）、生命化学科主任（東岸）、学生主任（小野）、および教務主任・大学 FD 委員（河野）の計 6 名から構成する。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

- ・専任教員および非常勤講師は 3 学科体制（平成 17 年度）での新カリキュラム科目（1、2、3 年生対象）の授業評価を春semester、秋semesterの 2 回行った。4 単位科目については複数の教員が担当している関係上、同科目でそれぞれ担当者別に授業評価を実施した（下記 ②）。また一部演習科目の授業評価も行った。
- ・専任教員（新任教員を含む）のプレゼンテーション研修会への参加（下記 ④）。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・学部長の方針により、専任および非常勤の全教員の協力を求め、新カリキュラム科目（1、2、3 年生対象）について、春semester44 名（延 60 科目）、秋semester36 名（延 41 科目）で実施した。ただし実験・実習科目、演習科目、また受講者が 10 名以下の科目については除いた。
- ・平成 19 年度春semester、秋semesterの集計結果を平成 20 年 5 月に Web 上で公開する予定である。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

先生方の授業に対するポリシーの違いにより、教員相互の授業参観の組織的な取り組みは実行出来なかった。ただし、教員相互の授業参観は授業内容・方法の工夫等を共有する上で必要と考える。

④ 研修活動の組織的な取り組み

平成 18 年度末の時点において、農学部の専任教員でまだプレゼンテーション研修会に参加していない教員は 9 名であったが、平成 19 年度には、3 回の機会に 3 名（新任教員を含む）が参加した。

⑤ その他の取り組み

- ・環境再生医の研修会に教員 2 名が参加し、環境再生医 2 級の資格を取得した。これで過去の取得者と合わせると計 6 名となった。今後は取得者による環境教育を実施していきたい。
- ・教務主任の指導により、科目シラバスの充実、および同一科目間でのシラバスの調整を図った。

(4) 今後の予定や課題

- ・ 授業評価アンケートの継続的实施（新カリキュラム完成年度）
- ・ 授業評価アンケート項目および実施科目（実験・実習・演習科目等）の検討
- ・ Blackboard システムの活用方法の検討と普及
- ・ 平成 20 年度プレゼンテーション研修会への参加
- ・ 学力不足の学生に対する対応
- ・ 4 単位科目の授業運用上の検討、および見直し
- ・ 大学院 FD 委員会と協調した教育技能開発の推進
- ・ TA の活用法の改善

§ 工学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という工学部宣言を具現化するために、教育内容や教育環境の向上をはかる。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

- ・工学部 FD 活動の多くは ISO9001 教育マネジメントシステムの活動と連携している。学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、など、主任会、教務担当者会で運営している。
- ・全教員参加による工学部 FD 研修会を年 1 回開催。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

ISO9001 に関しては、平成 16 年 3 月にマネジメントシステム学科が登録され、平成 18 年 3 月 15 日～17 日の審査において、知能情報システム学科、メディアネットワーク学科に拡大されてきた。今年度は、平成 19 年 10 月 15 日～16 日に更新審査を受けた。平成 20 年度から新学科編成となるため、これに対応したマニュアル改定を行う必要がある。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

- ・平成 14 年度から実施してきた学生による授業評価は、平成 16 年度秋 Semester から全教員・全科目に拡大した。更に平成 17 年度秋 Semester からは ISO9001 に対応するためアンケート項目を改定し、全学科を対象とした。平成 18 年度からは、諮問委員会である自己点検委員会から教務担当者会に移し、業務体系の中で実行している。
- ・公開：各教員には全体の集計結果と個人の科目別データ。学外 Web には全体の集計結果公開。学内 Web に全情報を公開（科目別集計シートにおいて教員名は除く。科目担当情報により間接対応可能）。学内 Web と同じ内容を冊子として、玄関ロビーで学生に公開。
- ・結果の活用：ISO9001 活動において期末に学科毎に行なわれる授業評価検討会における、各科目ごとの評価、来期への目標設定の中で各教員の授業改善に生かされる。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 19 年度実施件数

機械システム学科	2
知能情報システム学科	9
メディアネットワーク学科	2
マネジメントシステム学科	2

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・全学 FD 委員会で計画されたプレゼンテーション研修会に各学科から参加した。
- ・ISO9001 内部監査委員養成研修会を学内で開催し学科の教員に参加を要請した。

⑤ その他の取り組み

工学部 FD 研修会 平成 20 年 3 月 21 日 15:00～17:00

工学部改組に伴うフリーディスカッション

(4) 今後の予定や課題

平成 20 年度からの学部改組を ISO9001 活動と整合性を取りながら進める。即ち改組において「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

§ 経営学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ① 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）の輩出。
- ② リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。
- ③ 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。
- ④ 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

(2) 学部における FD 活動の組織体

- ① 学部の専任教員全員が参加する FD 会議（年 4 回）を教育研究会および研究発表会の形式で開催。
- ② 経営学部教員研修会（春学期 1 回：専任教員のみで開催、秋学期 1 回：専任教員および非常勤教員で開催。）今後とも継続して行う予定。

(3) 平成 19 年度の活動内容

- ① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）
 - ・ 学生による授業評価の実施と公開。
 - ・ 一年次教育の実施。（全学科目「一年次セミナー101・102」として平成 17 年度より実施中。）
 - ・ 「プロジェクト・セミナー I～IV」の選択科目として継続していくかどうかを点検した。また、観光ゼミナールのあり方も検討した。
- ② 学生による授業評価（活用状況、公表）

春学期計 3 回の FD 会議の結果、学生の授業評価について、ゼミおよび 50 名超過の大人数受講者科目の評価実施は担当教員の任意とすることを決定、実施した。
- ③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

平成 19 年度については、学生による授業評価を検討することを最優先とし、教員相互間の授業参観は実施を見送った。平成 20 年度についてはその実施について見直す予定。
- ④ 研修活動の組織的な取り組み
〈経営学部 FD 会議〉
 - ・ 研究報告
 - ・ 国際 FYE 会議参加報告
 - ・ 学外 FD 研修会参加報告〈経営学部教員研修会〉
 - ・ 第 9 回教員研修会（3 月実施）—経営学部の今後の運営についての①経営学部長報告、②大学として学生受入に当たる入試について、代々木ゼミナールの講師による受験生の動向、③出口に当たる就職動向についてキャリ

アセンターの報告、④入り口、出口の中間に当たる学生の学習状況について入試形態別学習状況報告を行い、その後、非常勤講師との懇親会を実施した。

⑤ その他の取り組み

- ・リメディアル教育（AO 入試合格者および指定校・公募推薦入試合格者対象）の実施。今回は学生 117 名、父母 49 名が参加し、1 日の体験授業と学部・学科ガイダンスとして実施。多数の参加により盛大に行われた。
- ・第 7 回英語科目担当非常勤教員研修会の開催。
- ・インターンシップ検討会の開催。今回は派遣先 19 社、派遣学生 33 名となった。

（４）今後の予定や課題

- ①授業内容・方法に関する研究（継続）。
- ②教員研修会の開催（継続）。
- ③専門科目共同授業に関する研究（継続）。
- ④リメディアル教育に関する研究（継続）。
- ⑤一年次教育に関する研究（継続）。
- ⑥学生確保に関する研究（継続）。
- ⑦学部・大学院一貫教育についての研究。

S 教育学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指している。指導に当たる教員は自らの資質と能力を向上させ、社会に貢献できる人材育成を行うことを通して、学部の競争優位性を高めることが教育学部 FD 活動の目標である。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当及び FD 委員で組織する。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況、成果）

本学部では社会が求める人材の育成をすることにより、学部の競争優位性を高めることを FD 活動の目標として掲げているが、全教員が担当する教育実習・保育実習での研究授業の訪問指導、またこれらの学校訪問の機会を単に学生指導にとどめるだけではなく、訪問校、園などの学校長や園長、施設長など学校責任者との面談を通して、教育現場の現状や社会的要請と教育の成果や改善すべき点等を調査する機会を FD 活動と位置付けている。さらに、毎年行っている教育長・学校長・園長・施設長などとの協議会において本学部に対する意見・要望を聞くことを通しても FD と人材育成に反映させようとしている。その結果を踏まえて平成 19 年度もコミュニケーション能力の低下や自然体験の不足を補完するものとして、教員が学生と共に参加した野外教育研修や tap 研修などのプログラムを教育計画に組み込み実行した。また、コスモス祭を表現力・創造力・実行力・伝達力などの育成を図る教育機会として捉え、学部全体で組織的に取り組み、教員と学生が共に育つ「共育」の成果として現れるように FD 活動を実践した。

② 学生による授業評価（活用状況、公表）

学生による授業評価はリフレクションシートとして春、秋セメスター終了時に実施し、講義内容や教授方法の改善点はどのようなところにあるのかを調査した。今年度は授業評価の結果を学部長への教育活動報告書に記載してもらった。今後は授業評価の結果を教員と学生が共有出来るようにしたい。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

教員相互の授業参観については、あえて特定の時間を設けず、いつでも授業の参観ができるような体制をとっているが、教員それぞれの持ち授業時数が多いためか、あまり相互参観が進んではいない。しかし、今年度もゼミ論発表会では、複数のゼミが公開発表を行い 2 年間のゼミ内容の集大成を見てもらった。

④ 研修活動の組織的な取り組み

- ・ 平成 17 年度から開始された一年次教育に関する研修を主な題材にして、答申「我

が国の高等教育の将来像」を踏まえ、基礎力の充実に図るために求められる教員の資質と能力の向上を目指して1年次、2年次の担任が中心となって今年度は学内で1日ではあるが終日研修を行った。このことは教育学部の独自性を発揮すべく内容を再構成し、特に2年次担任が中心となって一年間の「担任ゼミ」を充実させた。

- ・ 教員の資質と能力が、教職に対する愛着、誇りに支えられた知識、技能等の総体であることを、学部長をはじめFD委員が中心となり各種の会議等で発言し、FD活動基盤の意識化を進めた。
- ・ FDフォーラムに参加し他大学におけるFD活動の内容と実態を把握し、本学部の将来構想や各教員の資質と能力の向上を図るようにしている。

⑤ その他の取り組み

平成17年度、平成18年度に採択を受けた教員養成GP「実践的指導力を育てる体験学習プロジェクトー地域連携プログラムの検証と研究ー」の推進過程は、学部のFD活動にも大きな寄与があった。教員養成に係る学部教員にとって、当GPの各プログラムの遂行・省察の過程は、学部全体の方向に照らして各教員の教授行動を振り返り、改善を求める過程であった。「教員としての資質能力に関する調査」「各種体験学習プログラム」「教材・教授法開発プログラム」「宿泊集団生活体験プログラム」「シンポジウム」等への参画は、そのまま学部教員のあり方を強く示唆するものであった。

その意味においてFD活動にも、学部の独自性なり性格に基づいてのFDのあり方を考えさせる契機でもあったといえる。また、日常的な教育活動と密着してのFDのあり方を考えさせるものでもあった。これらの点、今後、より充実したFD活動に向けていきたいと考える。

(4) 今後の予定や課題

本学部の教員一人ひとりが大学の公共的役割や社会的責任の自覚を高め、学部の知的資産（知識・方法）の活用と発展・更新を図り、教育・保育専門職業人養成、幅広い職業人養成及び生涯学習機能や社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流）などの役割を担える学部の形成を進めるために一層のFD活動を推進する。具体的には、講義科目の授業評価アンケートだけではなく演習、実習、実技科目についてのアンケート用紙を作成し実施すること、そして、アンケート結果を集計し学部内そして学生への還元が課題でもある。

§ 芸術学部

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

- ・ 芸術学部のミッション「芸術による社会貢献」の意図を理解するとともにそれを実践する人材育成が学部全教員の目標であることを認識し、その達成のための方途を探究する。
- ・ 三学科それぞれの特性を反映した独自のカリキュラムに加え、学科相互間の学習連携の実現を強く意識したカリキュラムをも合わせて設定することで「社会貢献」に対する幅広く有意義な体験の機会を持たせる。
- ・ 「芸術による社会貢献」達成のための具体策として多様な職業の理解と就職することへの意識向上を図る。そのためにキャリアセンターとの連携を密にし、各種就職説明会および試験等の企画と実施に各学年の全担任が協力する。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

芸術学部長を中心に主任会メンバーがこれに当たる。毎月の主任会と主任研修会で活動目標とその達成手段を検討し、随時その成果及び新たな方策等を拡大教授会で報告する。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

- ・ 芸術学部では各セメスター終了時に、成績報告と各学科学年の GPA グラフを保護者に送付している。これにより学生及び保護者に、学生の就学状況の認識を促している。
- ・ 成績不振学生に対しては、次セメスター履修登録前に、芸術学部独自のスケジュールによる履修継続特別指導を行い、また指導記録を作成している。この業務により、成績不振の学生の継続的な指導が、可能になっている。
- ・ 通常授業とは別に、芸術学部の学生としての基礎的学力・知識向上を図るために、芸術教養テストを春セメスター1・3年次生に「アート・スタンダード・テスト」として2年間実施した。成績は予想以上に良好であり、学生の関心を広げる効果があったと看做せる。次年度は、その継続と内容の深化を行い、また段階的内容設定についての検討を進めていくために、担当教員を設けた。
- ・ 学生の言語スキル育成の一環として、メディア・アーツ学科において外国人専任担当による、主に音楽分野を対象とした「アート・イン・イングリッシュ」を開講し、2年が経過した。今後はコア科目の言語関連科目との関連性、及び芸術諸分野を統合した授業内容を考察する必要がある。
- ・ 卒業プロジェクトを中心に、優秀な成果を修めた学生に授与する芸術学部長賞を創設した。本年度はその第3回にあたるが、評価を形にすることにより、教員及び学生のモチベーションを高めることができたと考えられる。
- ・ 教科書編纂事業を各学科において検討中であったが、まずパフォーマンス・アーツ学科では鍵盤楽器（ピアノ編）分が完成した（来年度は管楽器分を出版予定）。

またビジュアル・アーツ学科では1年次の絵画基礎編が、ほぼ完成した。メディア・アーツ学科では次年度中にメディア・アーツに関する包括的な教科書を出版予定である。

- ・音楽系ではピアノの段階的履修クラスを設定、演劇・舞踊系では科目「パフォーマンス」に繋がる表現領域・企画等の科目を増設、ビジュアル・アーツ学科は実技を演習科目とし、メディア・アーツ学科との連携を打ち出した。これらにより、学生の多様化するニーズに徐々に対応してきていると考えられる。
- ・ビジュアル・アーツ学科とメディア・アーツ学科では、今年度試験的に前者の中心的科目であるエグジビション（ファッションショー）において、協同授業を行った。来年度はより本格的な協同授業の取り組みを行い、授業効果を挙げると同時に、両学科の学生のニーズに応じていく。
- ・就職指導への取り組みとして、学生のSPI試験、VPI試験、R-CAP試験を継続する。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

平成18年度に芸術学部向きの授業評価アンケートの回答用紙を作成し、芸術学部開講科目（受講者30名以上の講義科目）を対象に補講・試験期間内で実施したが、平成19年度も同様に継続した。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

三学科共に産学連携プログラムにおいて、校内教員のみならず学外者による授業参観を実施した。尚、連携先としてパフォーミング・アーツ学科<青山円形劇場>、メディア・アーツ学科<デジタルプラネット Music Japan TV>、ビジュアル・アーツ学科<町田市立博物館>などがあり、社会の文化施設との連携の中で行われているといえる。これらの連携授業は、学内からも複数教員の協同によって成立するものであり、教員相互による授業参観は必然的となっている。

また上記したファッションショーでは、来年度は学科を越えた教員相互の授業参観も、本格化する。

④ 研修活動の組織的な取り組み

一年次セミナーの授業時間の有効活用と、内容理解充実のために芸術学部独自の方式を継続的に模索中であり、実験的授業を新入生研修で実施した。この成果のデータ化には時間を要するが、学科を越えた担当教員による授業内容改善の話し合いが行われており、今後も継続する。

⑤ その他の取り組み

・eエデュケーションの促進

メディア教育推進室の協力を得て、授業におけるBlackboard活用を促進しつつある。来年度は学科を横断する授業において、その活用を計画している。

- ・ビジュアル・アーツ学科ではルツェルンアートスクールとBlackboardを通じて学習交換を行い、学生のプレゼンテーション能力向上を図った。

- ・教員の業績報告・研究者情報総覧記入の徹底と研究内容の明確化を促進する。これは教員個人の業績をあげるばかりか研究成果を学生へ還元することを重要目的としている。

(4) 今後の予定や課題

- ・ GPA 向上、附加能力向上とともに、社会貢献の機会と場の獲得のための重要課題の一つである就職と、どのように取り組むかを教員、学生双方に認識させていく方途を考えなければならない。特に3年次後半からのプログラムを検討する必要がある。
- ・ 様々な試みの継続と発展を心掛けていく必要があるが、その整理も必要と考えられる。例えば難しい面があるが、教員の業務の偏りをできるだけ減らし、各教員のモチベーションの向上を図る必要もあろう。

§ リベラルアーツ学部

本年度、文学部リベラルアーツ学科を発展させた形でリベラルアーツ学部リベラルアーツ学科が発足したことに伴い、FD活動は両学科で共通して行われた。

(1) FD 活動への取り組み理念・目標

大学を取り巻く環境が大きく変化し、さまざまな形で大学改革が進められる中であって、大学教育の質保証のために FD 活動は重要課題になっているが、本学部においては、文学部リベラルアーツ学科開設時より FD に積極的に取り組んでいる。学部・学科設置の趣旨と教育目標、ならびにリベラルアーツ教育の理念をいかに実現するかという視点から、日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開するように心がけている。

(2) 学部における FD 活動の組織体制

学部長、学科主任等各主任、FD 委員を中心に、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

(3) 平成 19 年度の活動内容

① 前年度からの実施予定項目（進捗状況・成果）

FD 研修会の開催、学生による授業評価の実施、教員相互の授業参観への取り組み、学外研修への参加などの活動で、概ね成果をあげることができた。

② 学生による授業評価（活用状況・公表）

各教員がそれぞれの授業形態に応じて、授業に対する学生のリアクションや評価を確認しながら、授業運営の改善に努めた。授業アンケートは、1 年次必修科目を中心に実施し、学生にフィードバックするとともに、結果を授業運営に反映させた。

③ 教員相互の授業参観の組織的な取り組み

本学科においては、学際的アプローチを研究と教育の特色にしており、専門分野の異なる複数の教員が協働して担当する授業科目や教育活動が多くある。それらの科目を中心に、教授方法や指導・評価方法について教員相互に客観的把握と意見交換を行い、改善に努めた。

④ 研修活動の組織的な取り組み

教育研究活動の改善へ向けて、日頃から学部全体で取り組んだが、本学部に特徴的な FD 活動として、年度末（2 月 21 日）に、学外施設において集中的に、ほぼ全員の教員が参加して FD 研修会を実施した。

この研修会では、(ア) まず、文部科学省高等教育局高等教育政策室長鈴木敏之氏による基調講演「最近の高等教育政策の動向」を行った。(イ) 次に、シンポジウム「FD と大学教育の諸問題」を実施した。話題提供として、「これからの

FDの在り方」(東海大学理学部教授・教育研究所所長安岡高志氏)と「大学におけるキャリア教育の現状と課題」(成蹊大学経済学部客員教授鈴木賞子氏)があった。(ウ)さらに、ワークショップ「リベラルアーツ学部諸課題の検討」というテーマの下、日頃の教育活動の点検調査と今後の課題について話し合った。今後の本学部の教育活動を推進していく上で、この研修会の開催は極めて意義深かった。

⑤ その他の取組み

プレゼンテーション研修会には本学部から4名が参加し、プレゼンテーションスキルの向上に努めた。

大学セミナーハウス主催「大学教員セミナー：大学改革と教育の質保証」(9月11～12日開催)に1名が参加し、近年の高等教育をめぐる動向と大学改革の方向に関する情報を収集した。また、京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第14回大学教育研究フォーラム」(3月26～27日開催)に1名が参加し、大学教育やFD活動に関する情報を収集した。これらの外部機関が主催するセミナーへの参加から、今後のFD活動のあり方を考える上で貴重な情報が得られた。

昨年度より学科全体で編集作業を進めてきた、書籍『キーワードで学ぶ知の連環ーリベラルアーツ入門ー』が今年度4月に玉川大学出版部より出版された。この出版活動は、リベラルアーツ教育の特色と在り方を認識し、再点検する機会となった。今後、これに続く出版物を検討している。

(4) 今後の予定や課題

- ①平成20年度より大学設置基準でFDが義務化されることに鑑み、本学部においてもFDへの意識をより高めるとともに、インターアクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部および教員個々人の「教育力」と資質向上を一層図っていきたい。今後は、これまでのFD活動の成果と問題点を踏まえた上で、学部運営の「PDCAサイクル」の中にFD活動を位置づけ、新学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを構築することが課題となろう。
- ②学生による授業評価に関しては、現在、全般的に形式化している傾向がある。その実施方法とともに、適切な活用法の検討が今後の課題である。
- ③教員の教育・研究活動に関する年次報告をより適切な方法で行うべく、一案として、「ティーチングポートフォリオ」(教育業績記録)の形式をとることが現在検討されており、次年度より実施予定である。

Ⅱ 教員研修

1. プレゼンテーション研修会

(1) 実施の概要

一昨年まで年間5回開催していたが、今年も昨年と同様、夏休みに2回、春休みに1回、合計3回実施し、本年の合計参加数は23名となった。平成14年の第1回からの延べ人数は、203名（うち在職者は184名）となり、所期の目的であった「全教員受講」は、ほぼ達したといえる。今後は新任教員を中心に研修会を続行し、教員の基礎体力ともいえるプレゼンテーション力を、維持管理していきたいと思う。

すでに専任教員の大多数が受講し、FD活動についての共通理解もできているので、どのクラスも積極的に効果的な運営が行われた。プレゼンテーション技法の向上だけでなく、教員間のコミュニケーションを図る上でも非常に効果的であった。2日間という短期間ではあるが、ここで培われた教員同士のつながりは貴重なものである。この教員間の輪を大切にしていくことが、さらに幅広いFD活動へと発展するための鍵となるように思っている。

(2) 研修プログラム内容

2日間、朝9時から17時までの日程で、以下に示すように演習が中心である。特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

第1日目	第2日目
第1章：プレゼンテーションの基本 第2章：視聴覚教材の使い方	第3章：質疑応答の技法 演習3：基本的な技法の演習 演習4：ディスカッション
演習1：模擬授業 プレゼンテーション(1) 演習2：改善点の明確化 ビデオ視聴による改善作業	演習5：模擬授業 プレゼンテーション(2) 第4章：まとめ 演習6：アクション・プラン作成

(3) 実施の状況

開催の日程および参加人数は以下のとおりである。開催場所は、全クラスとも研究管理棟 201・202 会議室である。参加者詳細は (7) 「参加者一覧」 参照のこと。

- ・ 第 1 回： 8 月 01 日 (水) ～8 月 02 日 (木) 8 名
- ・ 第 2 回： 9 月 11 日 (火) ～9 月 12 日 (水) 6 名
- ・ 第 3 回： 1 月 30 日 (水) ～1 月 31 日 (木) 9 名

(4) 実施後のアンケートから

アンケート項目は、継続的に変化を捉えるために、1 年目から同じにしている。項目ごとに A～E までチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(4) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第 4 行、「計」(網掛け行) は 3 クラス分の合計である。「点」は A=5、B=4、C=3、D=2、E=1 として平均を出したものである。

参考のため平成 14 年から平成 18 年までの平均も下段に載せた。1 年目は多少低いが、2 年目以降、ほとんど数字の変化はない。すべての項目が 4.3 ポイント以上である。最高点が 5 ポイントであることから、全体として満足度が高い研修として定着したと考えられる。

① 全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	2	0	0	0	8	4.8	1	6	1	1	0	0	8	4.6	1	2	5	1	0	0	8	4.1
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	2	3	1	0	0	6	4.2
3	9	0	0	0	0	9	5.0	3	9	0	0	0	0	9	5.0	3	6	3	0	0	0	9	4.7
計	20	3	0	0	0	23	4.9	計	20	2	1	0	0	23	4.8	計	10	11	2	0	0	23	4.3
18 年	13	3	0	0	0	16	4.8	18 年	12	4	0	0	0	0	4.8	18 年	3	11	2	0	0	16	4.1
17 年	28	5	1	0	0	34	4.8	17 年	27	7	0	0	0	34	4.8	17 年	12	16	5	0	0	33	4.2
16 年	29	3	1	0	0	33	4.8	16 年	28	4	1	0	0	37	4.8	16 年	10	21	3	0	0	33	4.2
15 年	34	3	1	0	0	38	4.9	15 年	32	4	1	0	0	37	4.8	15 年	12	22	2	1	0	37	4.2
14 年	41	15	2	1	0	59	4.6	14 年	43	14	2	0	0	59	4.7	14 年	10	38	6	4	0	58	3.9

② 研修会の質について

講習内容								講師								テキスト、教材、教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	6	2	0	0	0	8	4.8	1	6	2	0	0	0	8	4.8	1	6	2	0	0	0	8	4.8
2	2	4	0	0	0	6	4.3	2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	6	3	0	0	0	9	4.7	3	9	0	0	0	0	9	5.0	3	8	1	0	0	0	9	4.9
計	14	9	0	0	0	23	4.6	計	21	2	0	0	0	23	4.9	計	19	4	0	0	0	23	4.8
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	15	1	0	0	0	16	4.9	18年	14	2	0	0	0	16	4.9
17年	21	12	0	0	0	33	4.6	17年	33	1	0	0	0	34	5.0	17年	29	4	1	0	0	34	4.8
16年	27	6	0	0	0	33	4.8	16年	32	1	0	0	0	33	5.0	16年	29	4	0	0	0	33	4.7
15年	26	10	1	1	0	38	4.6	15年	35	3	0	0	0	38	4.9	15年	31	5	1	0	0	37	4.8
14年	36	17	3	2	0	58	4.5	14年	51	6	1	0	0	58	4.9	14年	40	17	2	0	0	59	4.6

③ 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	4	0	0	0	8	4.5	1	6	2	0	0	0	8	4.8
2	2	4	0	0	0	6	4.3	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	3	5	0	0	0	8	4.4	3	6	3	0	0	0	9	4.7
計	9	13	0	0	0	22	4.4	計	17	6	0	0	0	23	4.7
18年	13	3	0	0	0	16	4.8	18年	11	5	0	0	0	16	4.7
17年	20	10	10	0	1	32	4.5	17年	26	6	1	0	1	34	4.6
16年	24	8	1	0	0	33	4.7	16年	26	6	1	0	0	33	4.8
15年	24	9	5	0	0	38	4.5	15年	31	6	1	0	0	38	4.8
14年	28	19	3	5	3	58	4.1	14年	40	16	2	1	0	59	4.6

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	3	1	0	0	8	4.4	1	5	2	1	0	0	8	4.5
2	5	1	0	0	0	6	4.8	2	6	0	1	0	0	7	4.7
3	8	1	0	0	0	9	4.9	3	8	1	0	0	0	9	4.9
計	17	5	1	0	0	23	4.7	計	19	3	2	0	0	24	4.7
18年	10	5	1	0	0	16	4.6	18年	8	7	1	0	0	16	4.4
17年	29	5	0	0	0	34	4.9	17年	19	9	3	1	1	33	4.3
16年	24	7	1	0	0	32	4.7	16年	22	9	2	0	0	33	4.6
15年	22	12	2	1	0	37	4.5	15年	16	16	1	2	1	36	4.2
14年	17	24	6	6	0	53	3.6	14年	14	20	15	7	2	58	3.6

④ 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1	2	0	0	8	4.4	1	5	2	1	0	0	8	4.5
2	6	0	0	0	0	6	5.0	2	5	1	0	0	0	6	4.8
3	7	1	0	0	0	8	4.9	3	8	0	0	0	0	8	5.0
計	18	2	2	0	0	22	4.7	計	18	3	1	0	0	22	4.8
18年	14	1	1	0	0	16	4.8	18年	12	4	0	0	0	16	4.8
17年	23	6	2	0	1	32	4.6	17年	23	7	2	0	0	32	4.7
16年	27	5	1	0	0	33	4.8	16年	29	4	0	0	0	33	4.9
15年	33	4	0	1	0	38	4.8	15年	34	2	1	0	0	37	4.9
14年	46	9	2	2	0	59	4.7	14年	41	14	2	2	0	59	4.6

(4) - 2 フリーコメント概要

項目別の数字によるポイントはすでに安定しており、改善項目を洗い出すという点では無意味である。こうした場合ますますフリーコメントの重要性が増すことになる。23名のほとんど全員がコメントを書かれており、総数は59件あった。記述的に書かれたコメントを集計することは、大変労力を要するが、この中には多くのメッセージが含まれているので、今後も集計をしていきたい。

■「有用性」についてのコメントが13件あり、そのうち「自分の改善点がわかった」というコメントが一番多く、これはビデオでご自分の姿を客観的に見られたことによる効果であると思う。また部分的にでも「改善された」、「まだ改善されないが、改善しようと思った」など、改善点に関するコメントが多かった。それだけ、プレゼンテーションに対する意識の向上が見られたと感じた。

また2日目に実施したディスカッションについてのコメントも多く、FD委員と一緒に参加してもらい、FDの改善に結びつけていくべきであるという積極的なご意見もいただいた。これらのコメントからも、当該研修会が大学教員にとって有意義であることが感じられた。

■「内容」では、現在のカリキュラムについては、ほぼ満足していただいているようであるが、当該研修とは別に、「実験、実習向けプレゼンテーション研修」「特定学部の特化したプレゼンテーション研修」など、別形態のプレゼンテーション研修の必要性を書き込んでいるものもある。実際、これらの研修も必要であることを考えると、非常に積極的な意見と捉えることができる。

■「日程」については、「合宿形式を希望する」、「1日ずつ2回に分けての開催を希望する」というような、開催形態についての提案があった。「一泊」を希望する背景には、「本音で話し合えるディスカッション」の希望が感じられる。確かに、合宿形式には、それだけの

効果が期待できるが、「プレゼンテーション研修」とは別の研修として考えるべきだと思う。また「1日ずつ2回に分ける」という意見は過去にもあった。2日間連続して拘束されない、改善度合いを確認することができる、などのメリットがあるので無視できないが、運営面で問題がある。1回目と同じ人が2回目にも集まるという保証がないからである。現実問題としては、今までの形態が一番よいと考えられる。

また「10時始まりがよい」、「4時終了がよい」といった意見もあった。人数が8名程度であれば、早めに終了することが可能であるが、開始は9時が妥当といえるのではないだろうか。

■「開催時期」についてのコメントは第3回目に集中して多かった。成績提出時と重なったことから、この時期を避けるべきだというご意見である。毎回、学校行事とは重複してしまうが、特に試験期間が設定されなくなった昨年、成績提出締切が厳しくなり、このようなコメントが増えたのだと思う。来年度から開催時期については、もう少し再考したい。

■「参加形態」に関して、「必須である」「義務である」といった当該研修の必要性を述べたコメントの他、「若手に必要」「新人に必要」「年配こそ必要」など、具体的に書いてあるコメントも例年に比べて多かった。

(5) ディスカッションの実施

2日目午前中のディスカッションは大変好評で、FD活動を活発にしていけるためには、もっと時間をとって本音で話し合い、その意見を集約して、さらなる改善に結びつけるべきである、という積極的な姿勢を感じることができた。

これだけ大規模な大学の中で、学部・学科という壁を越えて本音でフリーディスカッションをしたことは、大変価値があることと思う。単にコミュニケーションが円滑になったということだけでなく、FDに関する共通理解を図ることができたことが重要である。FD活動について共感しあって築いた人間関係が、これからのFD活動を学部・学科を越えて広げていくための原動力となると感じている。

ディスカッションでは、FD活動関連だけでなく、組織的なことや施設のことなど多岐にわたる意見交換が行われた。いずれにしても、“より質の高い教育をしたい”、“玉川大学の価値を高めたい”、“学生に満足してほしい”という熱意に溢れている意見ばかりである。教員一人ひとりの熱い思いが感じられた時間であったと思う。これらの意見は、積極的かつ建設的なものばかりであり、今後のFD活動の幅を広げるための参考になると考えられる。前述したが、「このディスカッションをFD委員全員を含めて実施できるようにしたい」というコメントもあり、是非、FD委員会でこれらの意見を検証して、実施可能なことは実施の方向に進めていきたいと思う。

ディスカッションで出た意見を、クラス別に列挙する。3クラス分を統合せずにクラス別にするのは、フリー・ディスカッションの形式にしたため、出てきたテーマがクラス別に異なるからである。

特に他のクラスとは別のテーマについて記述すると、#1クラスでは、「大学の目標設定

を明確にして、教職員および学生にきちんと伝えることが大切である」といった FD の本質的なことに関わる意見が出された。#2 クラスでは「玉川らしさを強調し、玉川というアイデンティティを持った学生を育てたい」ということが述べられた。#3 クラスでは「学生による授業評価を授業改善に役立てる方法」や「学生を眠らせない方法」、「積極的に授業に参加させる方法」など、より具体的な提案が出された。

ここでは、なるべく生の声が聞えるように、抜粋したりまとめたりしないで、単に内容別に分類するだけにとどめて記述する。

第1回 (8/1~2) (名簿順、敬称略)

メンバー：池田 智、小原 廣幸、小島 比呂志、小酒井 正和

秋山 武彦、橋本 順一、勝尾 彰仁、小山 雄一郎 (計8名)

★FD 活動について

- ーもっと情報収集し、有効に活用するべきである
 - ・他大学の例に見習って、積極的に改善できるようにするとよい
 - ・情報収集が乏しい (もっと情報収集するべきである)
 - ・収集した情報を、有効に役立てる必要がある
- ーFD の仕組みを再考するべきである
 - ・FD 委員会の組織の運営を明確にする (曖昧な点が多い)
 - ・改善案が出ても、それをどうするか仕組みがない
 - ・意思決定の組織がねじれている (脳梗塞状態) のではないか
 - ・上からのビジョンを、理念に照らして判断することができない
 - ・トップダウンだけでなくボトムアップの活動も必要である
 - ・今回の話し合いの結果を吸い上げて、判断する仕組みが必要である
- ーFD 活動の現状について
 - ・本気で FD をするには非常勤講師までやるべきだが、対象になっていない
 - ・文科省の書類を出すのが目的になってはいないか
 - ・理念と FD 活動とのギャップがある
- ーFD 研修会について
 - ・研修会に、FD 委員会のメンバーが顔を出さないのはおかしいのでは？
 - ・「ディスカッション」の時間には、FD 委員も参加するべきではないか
 - ・ハラスメント関連の研修がほしい
 - ・プレゼンテーション研修以外の研修も必要である

★学生による授業評価について

- ー改善に役立っているか疑問である
 - ・改善されなければ、FD 活動に意味がない
 - ・評価を改善に役立てると本気で考えていない
 - ・アクション・プランを立てて改善に役立てるようにするべきである

－授業評価の目的が不明確である

- ・教員を評価するために使うのか、自分の授業を改善するために使うのか明確でない
- ・目的によって方法は変わるべきである

－方法について

- ・アンケートを取って集計するだけで終わっている
- ・評価項目は共通である必要はないが、組織として決める必要がある
- ・無記名ではなく記名式の評価にすべきである

★授業について

－15回／半期について

- ・15回の授業の根拠は？数でしか評価できないのはおかしい
- ・他大学では15回を必ずしも遵守しているわけではない

－内容について

- ・“学生のレベルが落ちている上に、必須にするべき科目を必須にしていない
(比較文化の語学、工学部の数学)”
- ・2年継続のゼミがなくなっている
- ・セメスター制にするにはコース数を減らさなければならないはずなのに増えている

－学生との約束事について

- ・シラバスに全部約束を書いておく（ペナルティなど）とよい
- ・自分の保身のためにもシラバスに書いておくとうよい

★FYE（一年次教育）について

- ・一年次教育は、内容的に再考するべきである
- ・教員も教えにくいし、学生にも役立っていないのではないか
- ・一年次教育の矛盾も、学生も察している

★教育のIT利用について

－学生にとっての影響を考えるべきである

- ・PPの作成やBlackboardへの書き込みだけで完成した気持ちになるのは危険
- ・回答を求めるだけの学生が増えている
- ・PPのファイルを求める安易な学生が増えている

★大学の目標設定について

－大学の目標が教員にも学生にも伝わっていない

- ・学生が大学に入る目的が就職のためという人が多い
- ・どんな人間を育てたいのか見えない
- ・大学としての共通目標が共有されていない
- ・大学の共通目標を作成する組織が必要である
- ・学生評価とGPAとをリンクしてフィードバックすれば理解できる

－目標が明確になればFD活動に生かせる

- ・学生がどう変わったのかを、どう評価するのが明確にならないとFDはできない
- ・学習目標に達したかどうかを評価すべきであるが、目標が不明瞭だと評価できない

★玉川大学のあり方について

- ・玉川大学はどういう大学であるかが不明瞭である
- ・外部から玉川大学がどう見られているのかを知るべき
- ・内部での評価と外部評価が異なる
- ・米国のリベラルアーツ系の大学のやり方をそのまま持ってきている
- ・リベラルアーツなら、それに徹すればよいが中途半端である

★学生の資質について

- ・今年の1年生が本格「ゆとり教育」の学生で、気質が異なっていることを感じる
- ・嘘をつく人が出てきた（今の1年生）
- ・ゴネ得が身についている人が多くなってきた（今の1年生）
- ・想像力が働かない
- ・学校への帰属意識が薄くなっていく
- ・就活が終わったら、ゼミをやめる学生が出てきた

★教員の仕事について

－教育と研究のバランスについて

- ・日本では、教員であり研究者であることを要求されるが両方同じにはできない
- ・玉川では「教育」といいながら、両方とも要求されている
- ・「教育実績だけの教員」と、「研究実績が必要な研究者」を分けるべきである

－教員の仕事内容について

- ・FDに熱心になれば、学者としての研究が疎かになる
- ・教員が大学の運営に参画している意識がもてない
- ・同様の会議や報告会が多く、本来の研究や教育の仕事ができない

－教員の仕事量について

- ・非常勤を減らしているため、専任教員の仕事が増えてきている
- ・1クラスの人数が多くなってきているので面倒を見られない
- ・15回の授業をしてから採点すると、後の業務が滞る

－教員の資質について

- ・仕事以外のことを言ったり動いたりしない教員が増えている
- ・重労働の教員の陰で、存在しているだけの教員が増えている
- ・学生は、教員の不安を敏感に察している
- ・教員に余裕がなくなっている

－教員の評価について

- ・「教育」を求めるなら、教育効果をどう評価するのが明確にするべきである
- ・教育実績で評価されているのかは不明
- ・学生を教えることが本業なのに、給与システムは「研究」で測られ評価されている

- ・大学教員は、社会への貢献も大きな業績であるのに評価されない
 - ・誰が教員を評価するのか不明である
 - ・評価システムが出来てきたばかりで実績がない
 - ・評価がシステム化されていない（公開できるものはない）
- －学生の教育方法について
- ・どういう叱り方をするのか難しい
 - ・教員数が減っているのに、実習がやりにくい
 - ・外部に連れての授業ができない状況になっている
 - ・ゼミ旅行もなくなっている

第2回（9/11～12）（名簿順、敬称略）

メンバー：齊藤 豊、新本 洋士、黒田 潔、
梅木 信一、大泉 由美子、中島 千絵 （計6名）

★FD活動について

- －FD活動は、全体が団結しないとできない
- ・学園全体として教員の意識改革が必要である
 - ・いろいろなことをやっているが、バラバラになっている
 - ・先生の質、人数など、全体を関連してみないと改善できない
 - ・教員のみならず、学生、事務などにも改善が必要である
 - ・人間関係が緻密で、一団となって活動する必要がある
- －玉川らしいFD活動があるはず
- ・文科省の言うとおりでなく、玉川らしさを出してほしい
 - ・学部ごとのFD活動が必要である
- －FD活動の現状
- ・改善のための阻害要因をなくすための具体策がない
 - ・具体的な改善策が出ていない
- －授業改善のために
- ・他の先生の技法を教えてほしい
 - ・他の先生の授業を視聴できるとよい

★学生による授業評価について

- ・授業評価と学生の成績を連携してみるなどが必要である
- ・学生による授業評価をどう分析するのが不明

★授業について

- －玉川らしい授業をするべきである
- ・大学が生き延びる必要のある時代に、玉川らしさを打ち出すのか、捨てるのか
 - ・工学部のソーラーカーなどは、玉川らしさが出ているのではないか

ー授業数について

- ・15回の授業を15日にする必要はないのでは？（例：1日3回×5日もありでは？）
- ・集中して単位を取れる授業があってもよいのでは
- ・授業の上限が決められているため、やる気のある学生が授業を取れない

ー授業内容について

- ・教員の個性、アイデアなどを生かせなくなっている
- ・コミュニケーション、プレゼンテーションが重要になってくる

ー授業の形態について

- ・人数が多いクラスでは学生のことがよく分からない

★FYE（一年次教育）について

ーFYEについて教員がきちんと理解していない

- ・一年次教育も教員全員が内容を知らない

ー玉川らしいFYEが必要である

- ・玉川らしさ：人間と人間とのかかわりがある⇒これをきちんと教えるべき
- ・玉川の理念をもっと教えてもよいのではないか
- ・一年次教育に、玉川の理念が織り込まれているとよい
- ・全人教育から一年次教育になって玉川らしさがなくなってきた

ー1年で終わらずに上の学年と連携するべきである

- ・一年次教育が、それで終わってしまっている（2年、3年と続くべき）
- ・2年次、3年次と続く中で玉川らしさが養われるのではないか

★学生の資質について

ー学生の資質が変化している

- ・ゆとり教育の学生が来春から入ってくるので、資質が変わってきている
- ・学生の学力、資質が大きく変化してきたことは事実である

ー学生の変化に対応するべきである

- ・具体的にどのように対応するのか分析されていない
- ・学生の資質の変化に対応できるように、分析が必要ではないか
- ・文学部では学生の追跡調査を始めている
- ・学生の変化に、教員がついていけないのではないか

ー玉川の学生というアイデンティティがなくなっている

- ・学生も均質化している
- ・玉川の個性がなくなってきている

ー学生同士のコミュニケーションが希薄になってきている

- ・学生の中でも学年を超えるとコミュニケーションがあまりない
- ・学生同士の間柄が疎になっている
- ・学生同士がコミュニケーションをとる場所がない（たむろできる場所がない）
- ・学年を超えたコミュニケーションが希薄である
- ・外部から見ると、他大学に比べ、教員と学生とが密であると感じる

- ・学生の福利厚生が貧弱である

★教育の IT 利用について

- ・ PowerPoint などを使いたくても、器材などのインフラが揃っていない
- ・ Bb がもう少し使い易いとよい

★教員の仕事について

－教育と研究のバランスについて

- ・ 研究と教育のバランスがよく分らない
- ・ 教育能力を上げることは大切であるが、研究とのバランスがむずかしい

－教員の仕事内容について

- ・ 優先順位をつけて、本当に重要な仕事をするべきである
- ・ 成績のつけ方など具体的な方法を教えてほしい

－教員の仕事量について

- ・ 担当コマ数が多い教員と少ない教員との差が大きい
- ・ 行事を含め教育関連の業務が多いため、研究に時間がさけない
- ・ 卒論の面倒を見るのは、相当量の労力である（アシスタントが必要）
- ・ 授業改善にかける時間がない
- ・ 捨てる勇気がないと、仕事が増えるばかりである
- ・ 15 回目にテストをして 4 日目に成績を出すのは無理がある

－サポート要員が必要である

- ・ 技術職員、助手のような補助スタッフが不在である
- ・ 統計上はスタッフが多くても実感はない
- ・ 個人研究費でアルバイトを雇えるとよい
- ・ 授業をよくするためには、アルバイトを含め全体の環境を改善する必要がある

－教員の資質について

- ・ 均質になるために、小さくまとまってしまう
- ・ 教員同士で排除せず仲間に入れる、という基盤が必要である
- ・ 教員に対するカウンセラーなどが必要である

第 3 回（1/30～31）（名簿順、敬称略）

メンバー：水野 宗衛、山本 繁夫、ダグラス・A・トレルファ、工藤 亘、
田澤 里喜、松川 儒、赤山 仁、佐藤 久美子、スティーブ・リア（計 9 名）

★FD 活動について

- ・ FD に関する上位の研修が必要である
- ・ FD 活動の目的意識を説明する必要がある
- ・ 文科省の指針（例：コマ数、FD 活動、第三者評価）を教員に浸透させることが必要
- ・ 学部を超えて授業を取れる仕組みがあるとよい（例：音楽と園芸）：私学のみ

- ・他大学の FD 活動状況の情報を知りたい
- ・他の国の情報も知りたい
- ・K-16 の中で専門が集まる（例：英語の教員全部）ような機会があるとよい
- ・FD 研修会の日程の設定を再考するべき（採点時期は避ける）

★学生による授業評価について

- ・シラバス記入の時期が、授業評価結果が出る前なので、結果を反映できない
- ・中間（7 回目ぐらい）に、自主的に授業評価をすると、その後の授業に反映できる
- ・毎回授業の最後に小テストと一緒に授業に対する意見を書いてもらおうと改善できる
- ・学生による授業評価を、どう分析し、どう利用するのかが不明確である

★授業について

ー授業内容について

- ・コア科目の見直しが必要では？（共通に取得できる授業内容）
- ・広く浅くだけでは大学の価値がない
- ・大学なので専門的知識を習得できるようにするべきである

ー玉川らしい授業の実施について

- ・K-16 だからエキスパートを育てる環境（例：音楽家）が可能ではないか
- ・授業内容と教員数で、現実には他学部の学生を受け入れる余裕はない
- ・K-12 と大学とのスケジュールが合わない

ー方法（改善案）

- ・小テストをすると寝る学生が少なくなる
- ・課題を出して画像を見せると寝ないで見る
- ・寝る学生は自己責任なので任せる
- ・私語は他人に迷惑なので止めさせる
- ・フリーディスカッションは寝ない
- ・学生のプレゼンテーションのときには、学生は寝ない
- ・多人数の場合、3～5 分の発表で全員まわす
- ・グループで話し合いをさせると寝ない
- ・学生に話させる（学生は、先生の話は聞きたくない）
- ・予習を前提に授業をしてもついていけない学生が多い
- ・予習させる仕組み（評価の対象にするなど）をつくるべき
- ・プレゼンテーションの準備は時間外によくやる（予習・復習）

★FYE（一年次教育）について

- ・FYE で、全学的に分けるものと学部別にするべきものを識別するべきである
- ・FYE で、共通する内容は専門家に任せるべきでは？
- ・基礎的な知識（例：PC）は、大学でつけてあげる必要がある（コア科目の意味）

★玉川大学の広報について

- ・外部へ、玉川をアピールする仕組みがほしい
- ・どのようにアピールするかコンセプトを決める仕組みがほしい
- ・農学部ではいくつかのグループ（太鼓や園芸）が自主的に実施している
- ・LA 学部では学生新聞を自主的に出している
- ・大学のアピールの方向が受験者に対するものが多いのでは？
- ・もっと授業内容や自主的な活動などに焦点を当ててもよいのでは？

★教員の仕事について

- ・業務が縦割りになっているため、重複することが多い
- ・教員が忙し過ぎるのでは

★大学の設備について

- ・教室の机は可動方式が望ましい
- ・4面とも黒（白）板の教室もほしい
- ・多人数にも耐えられる大教室も必要である
- ・学生が集まって予復習できる場所が少ない
- ・芸術関係のソフトは非常に高価なので、使用もむずかしい
- ・シラバスの入力画面の使い勝手が悪い

(6) 実施の成果

プレゼンテーション研修会の実施も6年を経て、大多数の専任教員が受講済みとなり、当該研修会が定着したと考えられる。フリーコメントやディスカッションからも分かるように、当該研修を通じて教員間に相互理解が深まり、FD活動への意欲が向上したと思う。改善への提案に結びつくような具体的な意見も多く出てきた。こうした具体的な提案は、大きな進歩と考えることができる。

次のステップとして、各学部内で行われる公開授業などを通じ、さらにプレゼンテーションの技術が向上していくことが望ましい。また、玉川大学全体の講義の質向上には、専任教員のみならず、非常勤の教員に対する研修も必要になってくるのではないかと思う。こうしたことも含めて、別メニューの研修会を検討する時期にきていると感じる。

(7) 平成 19 年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	在職者数 (人)	平成 19 年度参加者氏名 (敬称略)			※ 累積数 (人)
			第 1 回	第 2 回	第 3 回	
文	人間学科	13				6
	比較文化学科	20	池田 智	斉藤 豊		16
	リベラルアーツ学科	4				2
	国際言語文化学科	4				3
農	生物資源学科	15			水野 宗衛	11
	生物環境システム学科	14	小原 廣幸			8
	生命化学科	21		新本 洋士		14
工	機械システム学科	14		黒田 潔		9
	知能情報システム学科	15	小島 比呂志			10
	メディアネットワーク学科	12				8
	マネジメントサイエンス学科	12	小酒井 正和			4
経	国際経営学科	16				15
	観光経営学科	11				7
教	教育学科	30			山本 繁夫 ダグラス・A・トレルファ 工藤 亘	23
	乳幼児発達学科	10		梅木 信一	田澤 里喜	7
芸	パフォーマンス・アーツ学科	18	秋山 武彦		松川 儒	10
	メディア・アーツ学科	12	橋本 順一		赤山 仁	8
	ビジュアル・アーツ学科	11		大泉 由美子 中島 千絵		7
リ	リベラルアーツ学科	20	勝尾 彰仁 小山 雄一郎		佐藤 久美子 スティーブ・リア	16
計 (人)		272	8	6	9	184

※在職者数は助手以上で、平成 19 年 5 月 1 日現在の専任教員数。

※累積数は当該学科の平成 19 年 5 月 1 日現在在職者の中で、平成 14～19 年度に研修を受講した専任教員の累積数。

2. 新任教員研修会

平成20年度採用の新任教員（助教以上）に対し、研修センターと教学部の共催により、各部の協力のもと研修会を実施した。この研修会は平成14年度より開始されたもので、6回目の開催となる。参加者14名で、2日間の日程で行われた。

日 時：平成20年2月20日（水）10:00～16:50、21日（木）10:00～16:10

場 所：大学8号館123教室

対 象：平成20年度採用の助教以上の新任教員

研修目的：・玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解する
・専任教員としての業務に必要な知識を得る

（1）研修プログラム内容

【2月20日（水）】

時間	内容	資料 No.	資料	担当
10:00	開会／研修説明	—	—	研修センター
10:10	新任教員自己紹介	—	—	研修センター
10:50	休憩	—	—	—
11:00	・新教育の開拓者—小原國芳について ・校歌紹介	No.1	・玉川学園校歌（楽譜） ・校歌の生まれたとき	研修センター
12:00	昼食	—	—	—
13:00	ツアーガイドランス	別紙	・玉川学園案内図	研修センター
13:10	キャンパス・ツアー	—	—	教学部／ 研修センター
14:20	休憩	—	—	—
14:30	・玉川学園の組織機構 ・玉川大学の概要と専任教員の業務 (各種運営担当、担任業務、教務指導・ 学生指導等)、FD活動の現状	No.2	・玉川学園組織機構図 ・教職員在籍者数 ・学生数一覧	教学部教務課
15:10	休憩	—	—	—
15:20	・研究費と出張（国内外）の手続き他 ・教学事務手続要領について ・個人研究費、学部予算・執行について	No.3	・事務手続要領 ・個人研究費マニュアル	教学部学務課
15:50	・経費口座の開設と法人カードについて	No.4	・経費口座の開設と 法人カードについて	経理部資金課
16:00	休憩	—	—	—
16:10	玉川学園の個人情報保護方針について	No.5	・玉川学園における 個人情報保護	総務部
16:40	質疑応答／翌日の予定説明	—	—	研修センター
16:50	終了	—	—	総務部

【2月21日（木）】

時 間	内 容	資料 No.	資 料	担 当
10:00	・年間授業計画 ・カリキュラムの概要 ・学則・規程等 (Notes システムと Notes 掲示板の 活用、授業、休講、補講、試験、 成績等)	No.6	・始業日程 ・年間授業計画 ・年間授業計画（通大）	教学部 授業運営課 総務部 情報システム課
11:00	休 憩	—	—	—
11:10	研究者情報システムについて	別紙		教学部教務課
11:30	写真撮影（キャンパス・カード用）	—	—	総務部
12:00	昼 食	—	—	—
13:00	本学の ICT を活用した教育 (e エデュケーション) について	No.7		e エデュケーションセンター
14:00	休 憩	—	—	—
14:10	服務について	No.8	・大学教員の 勤務について	総務部 人事課・給与課
14:50	休 憩	—	—	—
15:00	新任教員懇談会	No.9	(メモ用紙)	教学部長
16:00	質疑応答・まとめ	—	—	教学部
16:10	終 了	—	—	研修センター

<その他別途配付資料>

- ・「図書館利用ガイド（教員用）」（図書館）
- ・「First Year Experience」（コア・FYE 教育センター）
- ・「大学生活ナビ」（コア・FYE 教育センター）
- ・「環境問題と ISO 14001」（環境部）
- ・「個人情報保護マネジメントシステムガイドブック」（総務部）
- ・「学校における生徒等に関する個人情報の適正な取扱いを確保するために
事業者が講ずべき措置に関する指針」解説（総務部）
- ・玉川学園案内図（キャンパスマップ）（研修センター）

<参考資料>

- ・「玉川学園の教育活動・玉川大学の教育活動・玉川大学大学院の教育活動 2007－2008」
- ・全人教育論、愛吟集、全人 2 月号

(2) 実施の成果

今年度の新任教員研修会では、研修内容・資料・講師の説明について、参加者のうち全員が、とても充実していた、あるいは充実していたと回答している。

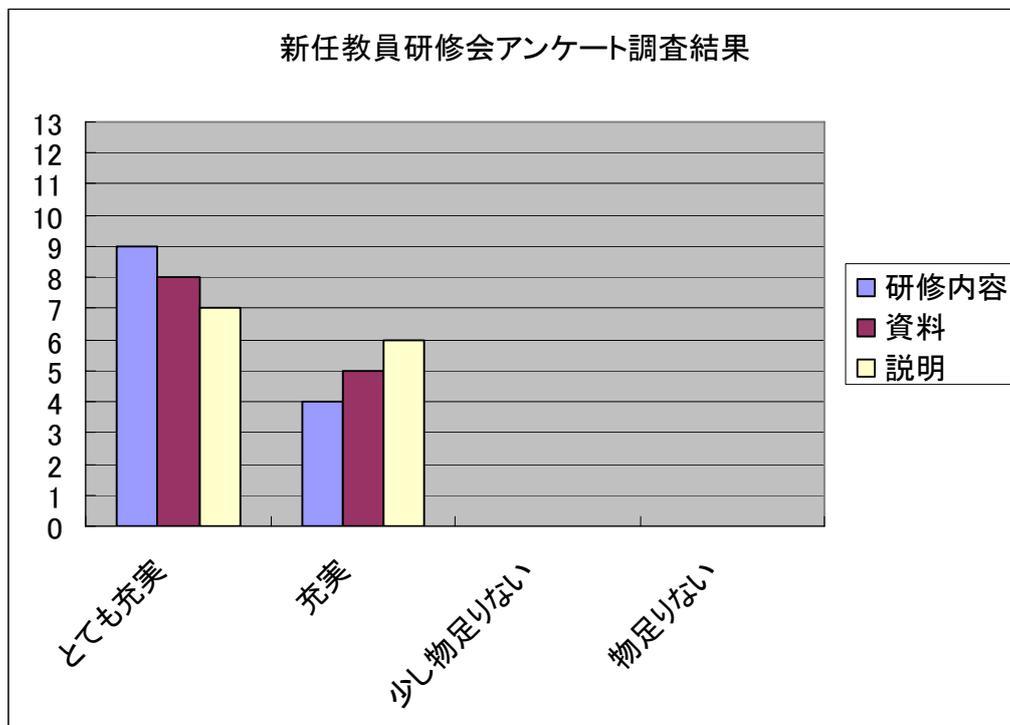
研修に参加してよかった点としては、

- ①研修を通じて玉川大学の理念、運営組織、教育方法、キャンパスの様子を把握できた。
- ②4月以降の勤務への安心感が得られた（特に、何がわからなければどこに問い合わせればよいのかがはっきりした）。
- ③すでにいただいた資料やインターネットでは得ることのできなかつた情報が得られ、4月からの勤務に関する具体的なイメージが描けた。
- ④理想的なこと（建学の精神等）と実務的なこととのバランスがよくとられていると感じた。
- ⑤職員の方々が大変親切にしてくださいましたので助かった。

などの意見が多くあった。これらの意見から、本研修会の目的は達成できていると評価できる。

一方で、改善を要する点として以下の項目が上げられた。

- ①「サービスについて」の部分に、もう少し詳しい説明があった方がよかったと思う。
- ②受身が多いので、すこし双方向の作業の時間もあるとよい。
- ③新任の教員にはボリュームがありすぎるかもしれない。





Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 農学部生物資源学科助教授： 肥塚 信也 先生

新任 1 年目、Blackboard 活用体験報告記

肥塚先生は本学就任前の 2 月、新任研修会終了後すぐに Blackboard 講習参加したい旨のお申し込みを受け、就任 1 年目から Blackboard を活用しておられます。肥塚先生が提供された授業コンテンツは学生から好評でした。今後もさらに Blackboard の展開されようとしておられます。

今回は、ご就任 1 年目、Blackboard を活用した取り組みを中心にアメリカで目にされ、Blackboard 活用事例の体験をもとに、「どのように活用されたか」、「今後どのような発展を描かれておられるか」について、具体的に報告していただきます。



Blackboard との出会い

私は本学に着任前は、米国のある州立大学の研究員でした。そのおり、ラボの実験助手の学生や修士・博士課程の大学院生達が授業前後や定期テスト前に Blackboard 上（以下、Bb と略します）に掲載された講義のスライドや録画映像を、ラボにあるコンピューターで実験の空き時間に関覧・学習するという姿をよく見かけ、「何時でも何処でも」という学習スタイルを間近にしました。そして新任研修会の際、本学でも Bb を導入していることを知り、自分の担当する講義等のサポートにぜひ活用したいと考えました。ここでは、私が昨年度 Bb をどのように活用し、それに対する学生達の反応はどうであったか、また、反省点は何かを紹介していきます。

講義での Blackboard の活用

◆ 科目名：分子生物学

生物資源学科 2 年生

◆ 授業の概要：発展科目群

遺伝子とタンパク質の構造と機能を学ぶことにより、生命現象を分子・細胞レベルで理解することが本科目の目的です。これらの内容は肉眼で直接観察・分析する事が非常に難しいものです。従って、わかりやすい教科書の記述、図表やアニメーションなどの補助資料の利用が効果的だと考えました。

①講義前日までにアナウンスエリアに、授業の範囲を掲示。

②授業では、スライドによる講義と Web 上のアニメーションの紹介を中心に進めました。また、内容に関する穴埋めシートを配布し授業への参加を促しました。さらに、授業へのコメントを出席カード上に記述してもらうことにより、次回の授業へのヒントとしました。

③終了後、使用した全ての資料、補足事項、Web 情報を掲載しました。特に難解と思われる

た講義回へのアクセス頻度は高い傾向であり、学生の学習努力の現われであると推察しています。こうした事からも授業をより客観的に進める上で Bb の利用が有用である事を感じています。

演習での Blackboard の活用

◆ 科目名：生物資源演習Ⅰ

生物資源学科 3 年生

◆ 授業の概要：専攻科目群

卒業研究時に必要な英文文献の読解力の養成のために、課題とした英文文献を輪読します。本演習が農学部生にとって恐らく初めての科学英語との出会いではないかと思えます。

①文献理解のヒントとなる図表をまとめたスライドを掲載。

②ネイティブスピーカーが文献を朗読した音声ファイルも活用しました。正しい発音や音読時の区切り場所が、内容理解の際に有用な事を伝えたいと考えたからです。この際、高校英語科 Paul McBride 先生が音読に快く協力して下さいました。この二つの補助資料を基に輪読を進め要点や日本語と英語の科学文献の表現上の共通点と相違点も紹介できました。特に、掲載した音声ファイルは授業以外の時間でも聴くことができるので、学生の反応もよくこれは Bb 利用の長所の一つと感じています。

反省と今後に向けて

教員にとっての Bb の最大の特徴も、「何時でも何処でも」です。端末さえあれば、資料を「何時でも何処でも」掲載できます。しかし、この特徴を如何に活用するか？これが最も悩んだところです。昨年度は、復習のサポートを重視する点から直後の資料掲載が中心でした。しかし、講義前の掲載のメリットや学生からの要望もあり、今後も常に重要な考察項目です。また、ディスカッション・成績管理など他の Bb 機能も利用したいと考えています。最後になりましたが、メディア教育推進室にはいつも心強いサポートや提案を頂きました。この場をお借りして感謝の意を表します。



Bb コース内コンテンツ内容



Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科助教：マティア先生 / リア先生

リベラルアーツ学部における生きた英語教育での活用

「広さと深さ」を求めるのがリベラルアーツ教育。人文科学から社会科学、自然科学にいたる学問を「広く」学術的に学び、特定専門領域を多角的な視点から「深く」追求し、「世界がわかる、自分がかわる」リベラルアーツ教育を展開していますが、その基盤を支える導入必修科目として位置づけられている English Communication を担当されています。2004 年度当初から Blackboard@Tamagawa を活用され、ご自身でリスニング教材の吹込みをして、学生の英語力の向上に力を尽くされている事例をご紹介します。



バリー・マティア先生

スティーブ・リア先生

科目の実施規模と講義での Blackboard の活用

◆科目名：イングリッシュコミュニケーション I (春学期開講、4 単位)、II (秋学期開講、4 単位)
リベラルアーツ学部 1 年次の必修科目 1 9 4 名受講、教員 5 人で担当

◆授業の概要：形式および内容の異なる 4 つのコースを同時受講していくユニークな構成。「クラス単位コース」と「英語力と英語学習意欲別クラス編成」で実施。著者の二人は、ホームルーム単位の授業を担当。スティーブが「インターネットイングリッシュ (50 分)」、バリーは「リーディング (50 分)」を担当。また学力・意欲別編成のクラスは、我々に加え 3 名の教員、計 5 名で行い (100 分)、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの 4 技能をバランスよく織り交ぜた内容。

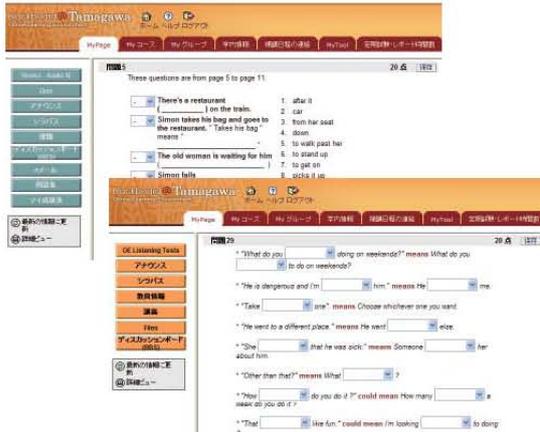
多様な Blackboard の活用方法について紹介します。

Blackboard によるオンラインイングリッシュ

4 つめのコースは「オンラインイングリッシュ」という名称で、全て Blackboard を介して行われます。科目評価の 20% を占めるこのコースでは、毎週、リーディングとリスニングから選りすぐりの教材が掲示されます。教材は 1 週間アクセス可能で、その間、受講学生は何度でも英文を読み、音声ファイルを聞くことができます。週の終わりまでに 20 ないし 40 程度の設問に答え、送信することで課題の完了です。4 週毎には、「インターネットイングリッシュ」の教室でリスニングテストを行います。このリスニングテストは辞書や友達の助けを借りずに、50 分以内に終わらせなくてはなりません。反対に、普段の課題については、学生達は教室外で励ましあい、協力しあって、英語に慣れ親しむことができるわけです。

設問付のリーディング、リスニング教材を作成し、アップロードしていくのは大変に時

間のかかる作業です。Blackboardの優れた点は、一旦アップロードした素材を、他のBlackboardコース、次学期や、翌年にエクスポートができる点です。使わないものも蓄積されますから、いつでも手を加えて再利用することができます。教員が授業計画に追い付かないような時には、まるで救世主です。



インターネットイングリッシュでの Blackboard 使用

この授業では、Blackboardを通してインターネットにアクセスし、様々な英語の課題をこなしていきます。ディスカッションボードやサーベイなどの機能を使うこともあります。

リーディングでの Blackboard 使用

リーディングでは、多読法 (extensive reading) を推進しています。受講学生はレベル別のリーディング教材から、毎週好きなものを選び、授業外の時間に読むことが課されています。多読法が外国語学習者に効果的であるもうひとつの側面は、楽しんで読むという点です。ここでも Blackboard の機能が発揮されます。教材として受講学生は文字とともに音声を楽しむことができるよう音声ファイルを作成し、PDF形式の文書ファイルと共にアップロードしました。学生は文字、音声の両方を Blackboard 上で堪能することができ、好評です。

思いがけない Blackboard の学習効果

Blackboard のアナウンス機能は大変便利で

す。「リーディング」と「インターネットイングリッシュ」は6クラスに分かれているので、全受講学生に同じ情報を正しく伝えるということは、至難の業です。アナウンスメント機能はこの問題を解決してくれます。さらに、外国語学習では、この情報伝達ということ以外にも、顕著な学習効果が実感できます。受講学生は、学んだ言語が実際に機能する場面向き合うこととなります。アナウンスメントは通常、数行の英語で構成されますが、それでも生きた英語に慣れ親しむ良い機会です。そこには、英語だけの問題ではなく、論理的な思考や、言語化されない了解事項などが含まれるため、はじめは戸惑う受講学生もいます。そこに日常的な文字情報をめぐる認知や解釈を鍛錬するプロセスが生まれます。対面型の教室では、何人かの決まった受講学生が、教員の質問や指示の意味内容を明確に把握するための質問を繰り返す光景が見られます。しかし、Blackboard を介して伝達されるアナウンスメントでは、このような支援は受けられません。一人ひとりが個別に情報に向き合い、解釈と対応のプロセスを踏まなくてはならないのです。



リーディングでの Blackboard 使用

おわりに

誰もが使いこなせる便利なアナウンスメント機能から、まだ咀嚼できていない高度な機能までを含む Blackboard を私たちはこれを年を重ねるごとに、より効果的に活用しています。大学教育の未来が、学生をどのように導き、授業をどのように進化させていくのか期待に胸が膨らみます。Blackboard は確実にその一端を担っていると実感しています。(翻訳：猿橋順子)



Tamagawa University

Blackboard@Tamagawa- A Good Practice

01 Department of Liberal Arts Barry Mateer / Steve Lia

English Education in the Liberal Arts Department

The aim of a liberal arts education is both depth and breadth. Students round out their education from a range of courses including the humanities, social sciences, and natural sciences: exploring specializations of their own interest. English Communication is one of the basic required courses focusing on communication and presentation skills. The teachers have integrated Blackboard@Tamagawa into their course since 2004. A special feature of their Blackboard course is audio files which they make to motivate students to not only learn but also enjoy English.



Barry Mateer

Steve Lia

Introduction

◆ As shown in previous articles in this publication, Blackboard can be used in various ways to both manage and to assess learning in a course taught by a single teacher. The following article looks at the role Blackboard has within the Liberal Arts English Communication I and II courses which are required for 194 first year students. Each of the semester courses is worth 4 credits, taught by five teachers, in four separate classes which are distinctly different in format and content. Some of the instructional groups are homeroom-based; others are based on students' level of English ability plus their motivation to use English in class.

◆ Two of the teachers (the writers of this article) teach all first year students in homeroom-based, 50-minute lessons. One is a 50-minute class called Internet English and is taught in a computer lab setting and the other 50-minute class is called Reading. In addition, there is a 100-minute class which is ability-based and divided into five levels; focusing on a combination of the four-skills of listening and reading comprehension and writing and

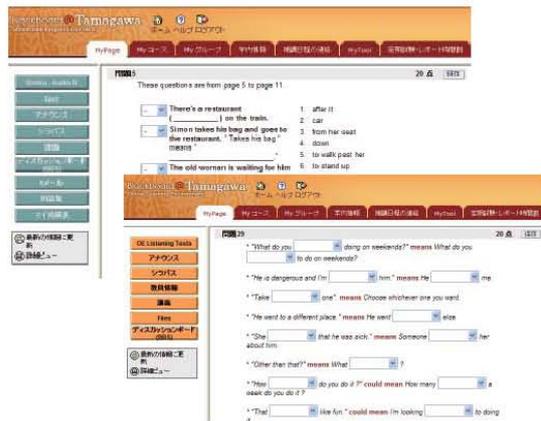
speaking.

Blackboard-based components of the course

The fourth 'class' of this 4-credit course, is not classroom based. It is entirely conducted through Blackboard and counts for twenty percent of the four-credit course evaluation. Each week there is a reading and listening selection put up on Blackboard, it is open for one week and during that time, students can read and listen to the selection and work on the 20 to 40-question quiz which accompanies it. Every fourth week there is a Listening Test given in the regular Internet English lesson. The listening test must be finished within the 50-minute class without the support of dictionaries or peers. For the quizzes which are open for a week, students are encouraged to collaborate outside the classroom and share strategies for test taking and for learning English.

There is no question, it takes a fair amount of time to create and upload a new reading and listening selections along with an accompanying quiz. A great feature of Blackboard is that once a teacher uploads something to a course, it can be exported to any other

Bb course, and most importantly to the same course the next semester or year. Files and folders and tests can stay unused within an old Blackboard course for semester after semester, but always available to be revived. Minor or major changes can be made in the tests content or format before uploading it again into a new Bb course. This is a life saver when the course syllabus requires a new quiz or test to be opened each week.



Internet English Class

Internet English Class

In this class students access the Internet through Blackboard and do various tasks in English; including using Blackboard tools and functions such as discussion board and surveys.

Reading Class

In the 50-minute reading class, there is no in-class intensive reading. The approach towards reading is one of extensive reading. Students check out a graded-reader each week from the library and read at home. Research indicates that out-of-class reading is the most significant predictor of oral communicative ability, most strongly related to language proficiency, and the most important direct contributor to TOEFL test performance. Along with the library, Blackboard is the key player in allowing students to become aware of the value and enjoyment of reading and listening to literature. Through Blackboard, students not only have access to PDF documents of some actual graded readers, but also to sound files for those readers. This combination allows students to choose from various strategies to improve their reading speed and accuracy; including the technique of shadowing.

An overlooked and underused Blackboard tool

Another very useful part of Blackboard is the

'announcement' function. Since the reading and Internet English classes are each taught to six different homeroom-based groups, it can be challenging to keep every class informed equally and accurately. Other than using announcements as a strategy for managing communication, announcements can be part of the learning content of the course. For anyone teaching a foreign language, announcements (and e-mails through Blackboard) provide a great chance for students to encounter a variety of personally relevant text of the language that is being studied.

From a skills perspective, Blackboard announcements provide a means for students to become more comfortable dealing with English. Some students find reading even a few sentences of English to be a task that they would like to avoid. many find it difficult to follow the logical sequencing of instructions written in English. Most students are confused by some of the unstated assumptions lurking within the text of an announcement. Students need much more practice in individually decoding and comprehending the written language used in daily life. Within a classroom setting, often the same few students tend to ask the questions to clarify what the teacher has said, but when that same information is given to students through a written announcement, there is not the usual support group available. There is more of a need and opportunity for each learner to deal directly with the information written in an English announcement on Blackboard.



Reading English Class

In conclusion

From the low-tech announcement to the still unexplored advanced features of Blackboard, we realize that Blackboard has been something that we have used more effectively each year in our courses. We are not sure where the future will lead our students or how our courses will evolve, but it is sure that Blackboard will be part of that future.

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科准教授：中田 幸司 先生

リベラルアーツ学部における教科専門教育での活用

中田先生は、平安宮廷歌謡の研究をはじめ、古代文学（和歌・歌謡・歌物語）を専門分野とされています。リベラルアーツ学部では、国文学および教科教育学を中心に、教員としての専門性を養う科目群においては、国語科指導法・古典文学演習を担当されています。学生の言葉を大切にされ、学生同士の意見交換および授業の事前の下地作りなどと多角的に Blackboard を活用されています。中でも教職関連の授業に非常に有効であり学生の学習効果として基礎学力の向上などを認識できるツールとして、国語科教員への育成に力を尽くされている事例を紹介いたします。



科目の実施規模と Blackboard の活用

- ◆ 科目名：国語科指導法Ⅰ 3年生 35名
- ◆ 授業の概要：教科の基幹となる「読む・書く・聞く・話す」理解力と表現力を「学習指導要領」のもと、学生自らがいかに現場の児童・生徒に伝えるかを考え、実践する科目です。とくに一見、「一対多」に陥りがちな授業形態の中にも「一対一の延長」とする姿勢を心がけ相互通行の指導法となることを目指しています。

事前・事後の課題として

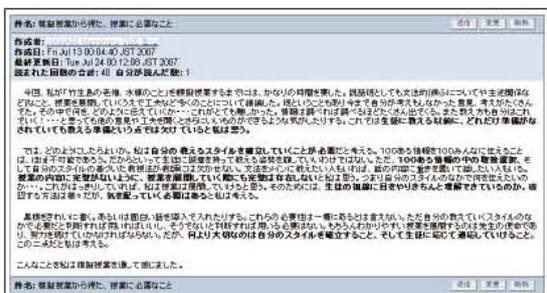
「よい答えを出すには、よい問いかけが大切」とはよく言われることです。また、自らが問題意識をもつことは自らを思考の杜へと導きます。この指導法のねらいには学生が実際に模擬授業を行い、ときには厳しく批評をしあい「気づき」を生むことにもあります。そのために、教授者はなるべく多くの問いかけを心がけるのですが、この問いに対する学生の答えが文字通

り、モンダイです。教室での学生の言葉をより充実させたい、そう考えたときに頼もしい「味方」、「Blackboard@tamagawa（以下 Bb）」の活用法がひとつ見つかりました。

第1回目には「国語科教員として必要なこととは何か」という問いかけを授業数日前に Bb の掲示板に掲げました。各自授業前に書き込むもよし、他者の意見を参考にすることもよし、授業後に改めて書き込むもよしと自由記入にしたのです。どこで記入するかで、少し学生の気質が見え隠れするのも楽しいものです。また、これ以降、「教科書とは何か」・「教材研究とは何か」などの難問を投げかけ、必要に応じて「授業前に必ず」とか「授業後にみんなの意見を聞いてから」などと条件を加えながら Bb に書き込むように指示を出し続けました。教授者の問いかけを授業時間だけでは終わらせず、学生が問題意識として抱き続けることを教室の外へ運ばせたのが Bb でした。

意見交換の場として

学生にとって、たとえばひとつの文章を教材化する、つまり教えるということはどういうことなのか、これは未知の経験であり大きな壁となります。今回は数種類の文章(随筆・物語・詩など)を数名のグループに分けて「教材化」する作業チームを作りました。むろん、目の前の文章の、何を・どのように・なぜ、教えなければならないのかをゼロから立ち上げるためには、限られた講義の時間だけでは足りません。やはり力強い「助っ人」となったのが「Bb」です。学生諸子はお互いの日程を調整する手段としてディスカッションボードを使い始め、そのうち、参考文献の情報交換、また生徒に何を伝えたいのか、という意見交換など、次から次へとやりとりとしてのスレッドを伸ばしていったのです。



Bb コース内ディスカッションボード内容

発表資料の事前配布として

こうして、「教材研究」や模擬授業のための「学習指導案」作りも作業チームに委ね、充実度はそのままスレッドの伸びが象徴し、情報・意見交換が成立していきました。教授者としては、このスレッド数がチームの進捗状況を把握する目安ともなり、状況に応じては「Bb」からア

ドバイスやコメントを配信し、たいへん有効でした。

講義の充実を計るには事前事後の学習、いわば予習・復習が大切であることは幼年期から言われ続けてきたことかもしれません。本講義でもっともメインとなる模擬授業の際にはやはり発表者から事前に資料が添付で教授者にメールによって配信され、その内容を確認したのちに「Bb」の講義欄に教授者が掲載しました。その直後には全員に Bb のメール機能から「資料を Bb に掲載」と連絡を入れ、発表者以外は各自がプリントアウトをした上で講義に出席するようなルールができあがりました。

お互いが資料を作り、プリントアウトするというアナログ的な作業を経ているからこそ、苦勞も共有でき、多少配信が遅れた学生に対しても「おたがいさま」といった意識が芽生えたことを教室で確認できたことが何よりも収穫だったように思います。



Bb コース内コンテンツ内容

今後に向けて

模擬授業に対する批評の結果を各グループは持ち帰り、初回に問いかけた「教員として必要なこと」に答えるべく、最終回には「教師に必要な 100 のおきて」を作り上げました。その内容はともかく、ここに至るまでの時間の有効な使い方をつねに支えていたのが「Bb」です。まだまだ私自身が十分に使いこなせていないながらも、少しずつ有効な利用方法を見出しました。今後はさらに機能を習得し、学生諸子へ還元できるよう努めたいと思います。

Blackboard@Tamagawa 活用事例

01 農学部生命化学科教授：佐藤 幸治 先生

生命化学科における専攻科目群の実験科目での活用

佐藤先生は、雑草防除を目的として「ごく少量で高い除草効果を示し、植物以外には影響がなく環境にやさしい」という特性をもつ新しい化学物質を創り出すことを目的とした研究をはじめ、生物有機化学を専門分野とされています。農学部で、有機化学および応用生物化学演習などの科目を担当されています。

化学あるいは分析化学などの講義科目で学ぶ様々な化学的思考方や分析手法などを文字や図表として理解するだけでなく、基礎的・基本的な操作技術を体得し、様々な現象を自分の目で捉えるための重要な科目である「基礎化学実験」において、特に、実験の修得方法に有効な Blackboard @ Tamagawa を活用した事例を紹介いただきます。



科目の実施規模と Blackboard の活用

- ◆ 科目名：基礎化学実験 1年生 60名
- ◆ 授業の概要：講義とも関連付けながら、実験の基本的な考え方・原理等の理解および補完をはじめ、用いる試薬の性質や調整方法、実験廃棄物の分別方法、実験器具や分析機器の取り扱い方法等を実践を通じ学ぶ科目です。学習目標は、実験結果のまとめ方・表現の仕方等の理解および修得です。

化学実験の現状

基礎化学実験は農学部全学科1年生の必修科目であり、私は生命化学科のクラスを担当していました。現在の生命化学科は農芸化学科の発展した学科であり、実験化学を主体とした学問領域です。この分野は生物学の領域を有機化学を用いて研究していく分野であるため、化学の原理・原則の完全な理解が望まれます。基礎化学実験は2,3年次の専門実験および4年次で

の卒業研究へと繋げていく基盤となる科目であり、毎回、実験原理の解説、操作の説明を行った後で実際に実験を行うという流れで進みます。しかしながら高校時代に化学を学んでいない学生も多く、自ら化学実験を行った学生はほとんどいないのが現状ですので、これらのこと全てを十分に行うには限られた時間内では不十分となるケースが増えてきました。また、現在の学生は文字を読み、文章から内容をイメージすることは苦手ですがコンピュータを使うことには抵抗を感じていないように見えます。この現状に対処するために、コンピュータの利用を考えていたときにメディア教育推進室から Blackboard @ Tamagawa (以下 Bb) 利用の話を奨められましたので、これを利用しようと考えました。

リッチメディアコンテンツの利用

まずは定量分析実験として「中和滴定」、有

機化合物の合成実験として「酢酸エチルの合成」の2つのコンテンツを作成しました。副手の先生方に実験を行ってもらい、各回の実験で使用する器具、試薬、および操作を静止画・動画を使い分けて撮影し、Bb上でいつでも閲覧できるようにしました。



図. Bb コース内リッチメディアコンテンツ

実験操作の概要もパワーポイントで表示し操作の映像を見ながら、実際、文章で書かれた実験操作のどの部分を行っているかを同時に確認できるようにしました。特に注目すべき点は映像中にテロップを入れることで注意を促すように工夫しました。これにより予習の段階で、実験で使用する試薬が固体なのか液体なのか、どのような器具を用いるのか、そして操作の流れも映像から把握しておくことができ、「実験書」を読んだだけでは理解できなかった内容をビジュアル的に理解させることが可能となると考えます。

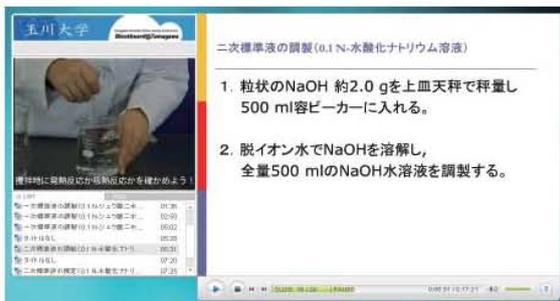


図. テロップ付き映像コンテンツ

実際の授業で利用してみると

実際、このように映像を見てから行った実験では的確な操作で実験全体が進んでいたようです。また、器具の使用法や正しい操作は「安全な実験」に直結する重要な要素ですが、これらについての注意点は細かな説明が多く、従来のように教員が教卓で行う方法では、広い実験室で実際学生による確認が難しい場面も多かったのが実情です。しかしながら、Bbを活用することでそのような部分を拡大した映像で提示することができ、伝えたい内容が学生にとって明確になったことも大きなメリットでした。予習だけでなく、実験後にレポートをまとめる段階でもこの映像を見ながら自らの実験の反省点を的確に振り返ることが可能である点も重要です。

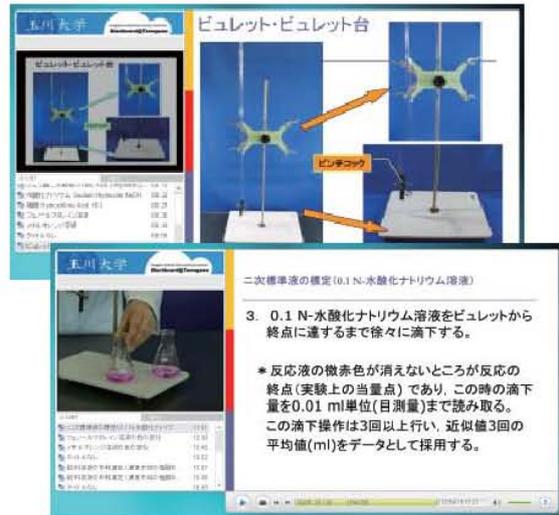


図. 映像コンテンツ

改善の余地

改善の余地を大きく残した化学実験操作のBb活用であります。Bbを活用することで実験自体の理解度が向上し、自分の力で実験を進めることができ、操作に集中することが可能になる他、映像で理解できるBbの活用は、文章で書かれた操作法理解への橋渡しになると考えられます。現在は他の実験項目についてもコンテンツを作成中です。最後に作成に協力いただいた農学部生命化学科の副手の皆様とご助言を賜ったメディア教育推進室方に感謝申し上げます。

4. 大学FD研修に関する調査

(1) 調査について

- ①調査の趣旨 大学FD委員会が開催するFD研修について、各学部教員の感じている研修の必要性や希望を参考に計画・実施するため
- ②対象者 大学全学部の専任教員
- ③調査方法 所定の調査用紙に記入のうえ、学内便で研修センターに提出
- ④締め切り 平成20年1月18日(金)12:00
- ⑤調査結果について 集計した結果を大学FD委員会に報告、また各学部のFD委員を通じて、調査対象者にフィードバック

(2) 調査内容

1. 大学FD研修の内容として、以下の項目のうち、どれが必要であるとお考えですか。
全部の中から3つを選び、必要優先順に()内に1~3の数字を記入してください。

- A. 授業に関する事項
- ①教育方法の考え方 ()
 - ②学習目標の立て方 ()
 - ③シラバスの作成方法 ()
 - ④プレゼンテーション技法 ()
 - ⑤授業評価方法と処理 ()
 - ⑥ITの活用 ()
 - ⑦eラーニング ()
 - ⑧学生とのコミュニケーション ()
 - ⑨その他() →具体的に []
- B. 教育関連の法規に関する事項
- ①教育法規 (大学教育との関連と理解の必要性) ()
 - ②その他() →具体的に []
- C. 教育界の動向
- ①他大学のFD活動への取り組み事例 ()
 - ②教育活動の改善事例 ()
 - ③大学の経営に関する取り組み事例 ()
 - ④教員・研究者としての職業倫理 ()
 - ⑤高等教育界の情勢の変化 ()
 - ⑥その他() →具体的に []
- D. 玉川大学に関する事項
- ①教育理念・教育信条の理解 ()
 - ②学内の教育活動の実態 ()
 - ③他学部のFD活動についての取り組み ()
 - ④その他() →具体的に []

2. そのほか、研修の方法等について希望があればお書きください。

(3) 大学FD研修に関する調査 まとめ

区分	No.	学部等 有効回答/回答率 研修内容	文学部				農学部				工学部				経営学部			
			21/51.2%				22/53.7%				28/52.8%				20/74.1%			
			1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計
A 授業に関する事項	①	授業のあり方総体	5	1	3	9	2	1	2	5	3	1	0	4	4	1	2	7
	②	学習目標と学習評価	1	4	1	6	3	3	0	6	3	5	2	10	1	2	0	3
	③	シラバスの作成方法	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	1	1
	④	プレゼンテーション技法	2	3	0	5	1	1	4	6	2	0	1	3	0	2	0	2
	⑤	授業評価方法と処理	0	0	3	3	1	2	0	3	3	3	1	7	1	1	0	2
	⑥	ITの活用	1	0	1	2	2	0	1	3	1	1	1	3	2	0	1	3
	⑦	eラーニング	0	1	2	3	1	3	1	5	1	0	1	2	0	2	1	3
	⑧	学生とのコミュニケーション	1	1	3	5	3	2	2	7	3	2	1	6	2	0	5	7
	⑨	その他	1	1	0	2	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1
B 教育法規	①	教育法規	1	1	1	3	0	0	1	1	0	1	2	3	0	1	2	3
	②	その他	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C 教育界の動向	①	他大学のFD活動への取り組み事例	0	1	0	1	0	2	1	3	2	3	1	6	1	3	2	6
	②	教育活動の改善事例	1	4	1	6	1	4	2	7	0	5	4	9	1	3	0	4
	③	大学の経営に関する取り組み事例	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	1	3	2	0	0	2
	④	教員・研究者としての職業倫理	0	1	2	3	1	1	3	5	1	0	2	3	2	0	0	2
	⑤	高等教育界の情勢の変化	3	1	2	6	4	1	0	5	4	2	6	12	2	2	0	4
	⑥	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
D 玉川に関する事項	①	教育理念・教育信条の理解	3	0	0	3	1	1	0	2	3	1	1	5	1	2	1	4
	②	学内の教育活動の実態	0	1	2	3	1	1	3	5	0	1	2	3	0	0	2	2
	③	他学部のFD活動についての取り組み	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1	2	4
	④	その他	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

教育学部				芸術学部				リベラル アーツ学部				通信教育部				学術・脳科学 教育博物館				全 体	
23／59.0%				21／58.3%				17／85.0%				10／76.9%				13／46.4%				175／58.7%	
1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1の合計	総計
4	2	2	8	2	0	2	4	0	0	0	0	5	1	0	6	0	2	0	2	25	45
1	1	3	5	1	1	1	3	1	1	0	2	1	0	0	1	3	0	2	5	15	41
0	0	0	0	3	0	1	4	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0	1	4	11
2	2	0	4	0	1	1	2	2	0	1	3	0	0	1	1	1	0	1	2	10	28
1	1	3	5	0	2	0	2	1	1	0	2	1	0	0	1	0	1	0	1	8	26
0	1	2	3	1	2	1	4	1	0	1	2	0	2	0	2	0	1	0	1	8	23
1	1	1	3	3	1	1	5	1	3	0	4	2	0	1	3	1	1	2	4	10	32
6	1	0	7	2	0	1	3	1	0	2	3	0	2	0	2	2	0	1	3	20	43
0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	3	8
1	0	0	1	1	0	2	3	0	0	1	1	0	0	0	0	2	1	0	3	5	18
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
1	2	0	3	3	2	1	6	1	1	3	5	0	0	2	2	0	0	1	1	8	33
2	2	3	7	1	4	3	8	2	2	1	5	0	3	0	3	0	0	0	0	8	49
1	2	1	4	0	0	0	0	0	3	1	4	0	0	0	0	1	0	1	2	4	16
0	2	1	3	1	1	0	2	0	3	1	4	0	0	0	0	0	1	0	1	5	23
0	1	1	2	1	2	0	3	4	1	1	6	0	0	0	0	0	3	1	4	18	42
0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2	1	0	3	0	2	1	3	2	0	1	3	1	1	2	4	1	1	0	2	14	29
0	2	5	7	1	2	1	4	0	0	1	1	0	1	3	4	0	0	1	1	2	30
0	1	0	1	0	0	4	4	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13
1	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	4	5

(4) 自由記述部分のコメント

A. 「授業に関する事項」の⑨「その他」の希望内容

- ◆文学部
 - ・学習方法論
 - ・教授方法論
 - ・議論を促す具体的な方法
- ◆農学部
 - ・授業の技術
 - ・ディベート、グループワークなど
- ◆工学部
 - ・リメディアル教育
- ◆経営学部
 - ・ディベートの方法
- ◆教育学部
 - ・個々の授業について学生の実態・希望を明らかにする。
- ◆リベラルアーツ学部
 - ・インストラクショナル・デザイン（授業デザイン）
- ◆学術研究所・脳科学研究所・教育博物館
 - ・創造的、刺激的な脳科学情報に基づいた授業や学習法

B. 「教育関連の法規に関する事項」の②「その他」の希望内容

- ◆文学部
 - ・著作権に関する法規
- ◆リベラルアーツ学部
 - ・設置基準等の基本的な理解

C. 「教育界の動向」の⑥「その他」の希望内容

- ◆工学部
 - ・他大学におけるリメディアル教育の実情
- ◆教育学部
 - ・玉川大学の教育の質は他大学との比較でどの程度のものか？

D. 「玉川大学に関する事項」の④「その他」の希望内容

- ◆文学部
 - ・学内の組織について
- ◆教育学部
 - ・各学部の評価と問題（課題）
- ◆芸術学部
 - ・玉川教育としての根本

- ◆リベラルアーツ学部
 - ・入試広報・キャリアセンターの方針について
- ◆学術研究所・脳科学研究所・教育博物館
 - ・大学のビジョンと方向性、共通理解

E. 大学FD研修の方法等についての希望

- ◆文学部
 - ・具体的にはないが、研修は有意義でした。
 - ・玉川大学の弱点は、一部を除いて各教員の専門分野（研究テーマ）を同僚が知らないことだと思う。その結果、先入観で担当科目が決定して、士気が低下している面がある。現有リソースの活用をさらに推進する必要がある。
 - ・教育現場での価値基準を共通化する必要がある。研修方法としては専任教員のグループ相互勉強会（ファシリテータを置いて）から始めるべきかと思う。
- ◆農学部
 - ・学生が授業に参加するための工夫についての事例紹介などが知りたい。
 - ・新任研修時に短時間でよいのでFDについて何か研修があるとよい。
- ◆工学部
 - ・PDSAの仕組みづくり、特にS-FD研修の効果測定、評価を各レベル（各人ごとも含む）でしっかり行うことが重要であると思う。
 - ・まず必要なのは教育界の動きを知ることではないだろうか。
 - ・最高学府としての大学では、最高レベルの学問を講義するかどうかの明らかな方針を決める必要がある。
 - ・第三者評価に対応できるような体制づくりの根幹となるシステム要素の充実。
- ◆経営学部
 - ・全員参加型FD活動が望まれる。
 - ・オンデマンド教育の要請は社会ではなく、学生にあるのではないかと思う。
 - ・外国の大学の状況について知りたい。
 - ・他大学の経営実態などの講義（講演）をお願いしたい。
 - ・斬新な教え方（ディスカッション形式等）の事例研究に基づいた教員研修会などが、大学教員の教え方の向上に役立つのではないかと考える。
 - ・技術の研修も重要だが、大局を理解した上でないと小手先の結果しか出ないのではないかと。必ず理念と技法双方の修練が必要。
- ◆教育学部
 - ・SD研修を増やし、その話を聞きたい。
 - ・大学教員も主たる任務の一つは「授業実践」である。1コマ1コマの「授業」を通して、大学人としての「授業力」を向上させることを核にすべきである。よって、その向上に貢献するFD活動を優先すべきと考える。
 - ・何をどのように変えることで、授業が変化するのか、工夫と努力が必要だと思っている。他の先生方の成果を知りたい。
 - ・個々の教員に対する評価とフィードバックを明確にする。

- ・モデル授業の実施と分析、評価、及び所要経費の充実

◆芸術学部

- ・学内での研修では集中しにくいので、強制力のある短期合宿形式での実施が必要と思う。
- ・現在は「やりっぱなし」なので、研修後のアフターフォローが必要。
(研修後の授業アンケートや、効果的な授業参観など)

◆リベラルアーツ学部

- ・授業方法などは、若い教育者には必要であるが、教授クラスになっている場合は、日本、世界を含めた教育界の動向や教育活動への取り組みについて知りたいと考える。
- ・学部間で情報交換が容易にできるような会があれば参加したい。通常業務内では学部を越えて教員同士が情報交換できる機会がなかなか得られない。

◆通信教育部

- ・各部もう少し統一的な進め方が必要であると考えます。
- ・あまりにも先生方との交流がない。問題である。

◆学術研究所・脳科学研究所・教育博物館

- ・「これからの大学のあり方とそれに対する各教員の役割」などといった全体の中の個人がどのようにすべきかといった内容があると良いのではないかとと思われる。
- ・なるべく少人数で進めていただけましたらありがたい(質問などをしながら必要なことを効果的に学ぶため)。

以 上

Ⅲ コア科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

前年度同様、今年度も春・秋学期においてそれぞれ最終授業にて実施した（一部、科目担当者の都合等により補講・試験期間中に実施）。対象科目はコア科目、コアⅠ・コアⅡ科目の全科目（実験・実技科目を除く）であるが、学期により対象科目群を限定している。

春学期：全人教育・FYE 科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群

秋学期：全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、社会文化科目群

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝131名／143名（91.6%）

秋学期＝141名／144名（97.9%）

実施開講クラス数：春学期＝200クラス／219クラス（91.3%）

秋学期＝238クラス／245クラス（97.1%）

回答学生数：春学期＝8,770名／10,622名（82.6%）

秋学期＝6,653名／7,744名（85.9%）

(2) 実施時期

春学期：7月16日（月）～7月28日（土）

秋学期：1月15日（火）～1月29日（火）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がクラスでマークシート用紙を配布、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.82 参照）

2. 集計結果及び公表（p.57～68 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

コア科目群（全体）、全人教育論、全人教育・FYE 科目群、言語表現科目群、言語表現科目群（英語）、言語表現科目群（英語以外の語学）、社会文化科目群、自然科学科目群、生活関連・総合科目群
--

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 9 分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成19年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

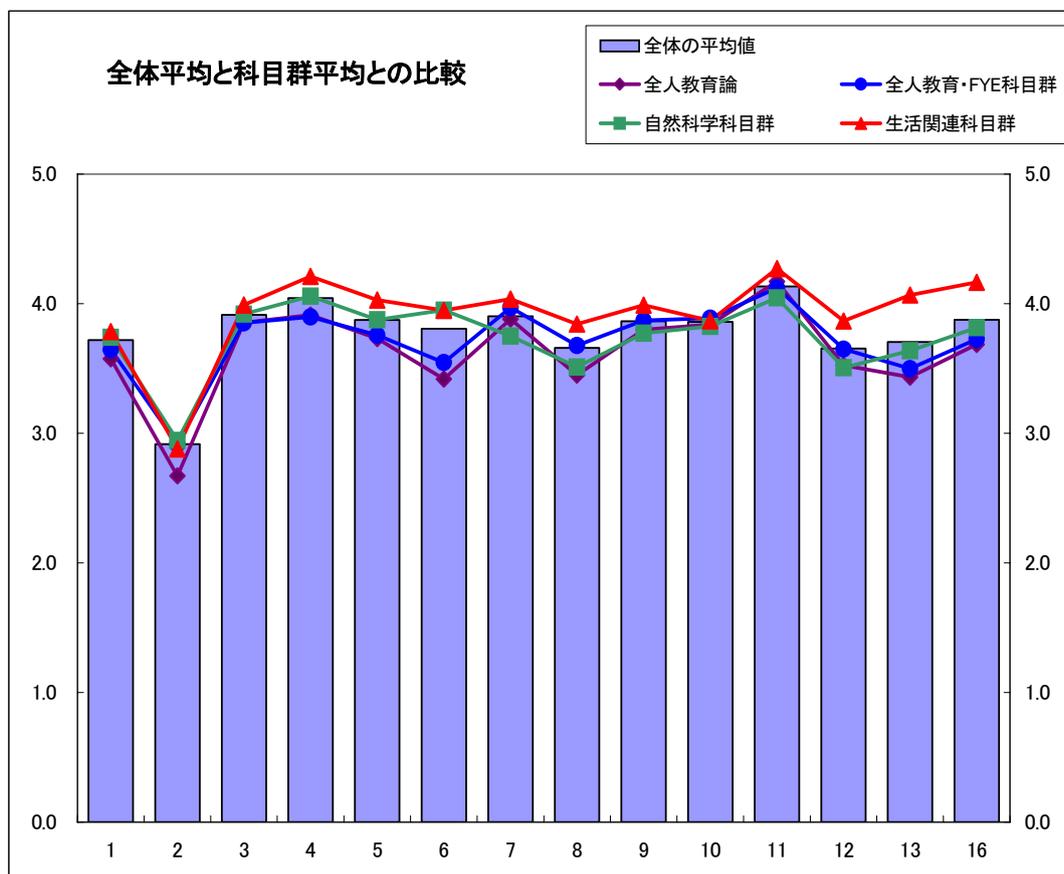
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 8770

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	20.3%	42.5%	27.9%	7.4%	1.9%	15
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	7.9%	19.4%	39.8%	22.5%	10.5%	17
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	31.8%	37.3%	23.1%	6.0%	1.7%	22
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	38.6%	34.2%	21.6%	4.2%	1.4%	20
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	30.5%	34.4%	28.7%	4.6%	1.7%	37
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	32.4%	30.5%	25.4%	8.8%	2.9%	32
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	39.9%	28.1%	19.1%	8.3%	4.6%	37
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	28.3%	27.4%	30.2%	9.9%	4.2%	22
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.5%	32.3%	26.8%	6.1%	2.3%	31
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	32.2%	32.3%	26.9%	6.4%	2.2%	25
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	45.0%	29.9%	20.2%	3.5%	1.5%	28
	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	23.6%	35.4%	27.8%	9.3%	4.0%	63
13 授業の内容に興味もてた	3.7	29.8%	30.2%	26.0%	8.9%	5.2%	71	

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.9	36.4%	29.7%	23.3%	6.5%	4.2%	1104



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入
◎無効数について
無答、複数回答、記入ミス
の数

平成19年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

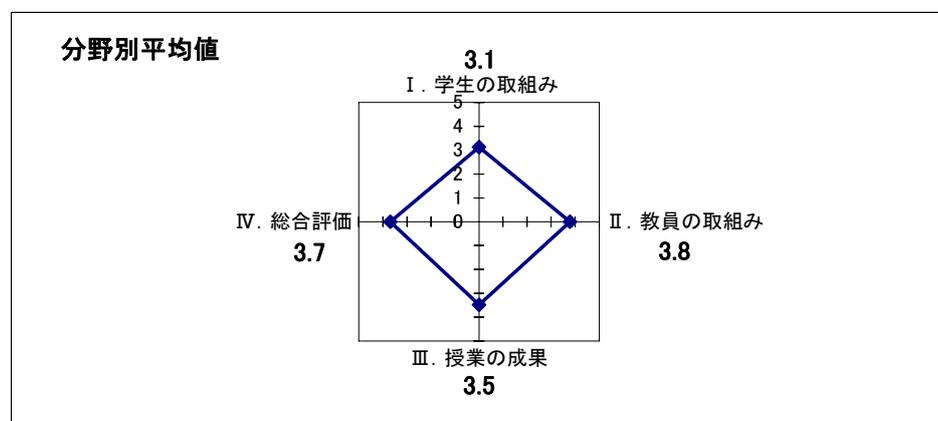
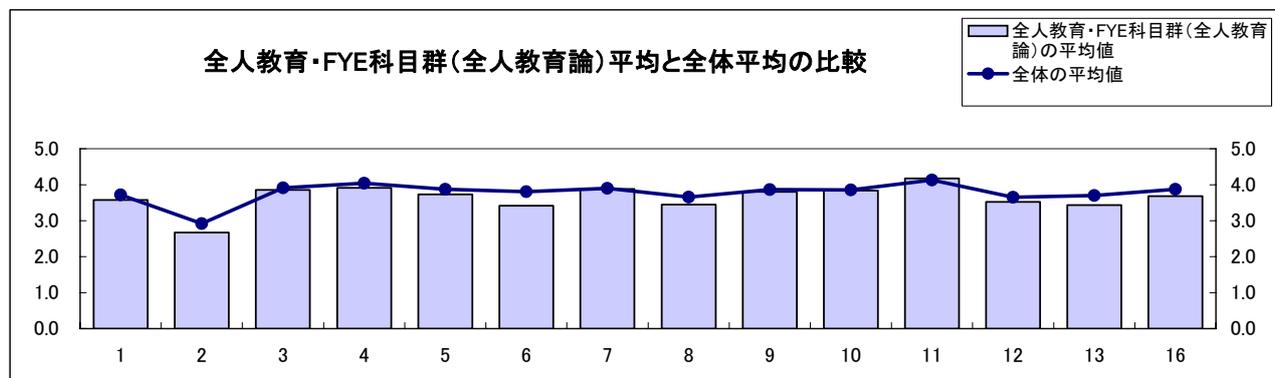
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 1676

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	15.5%	41.7%	30.7%	8.8%	3.2%	3
	2 授業以外によく予習復習した	2.7	6.3%	13.2%	38.8%	24.9%	16.8%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	30.3%	35.5%	25.9%	5.8%	2.5%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.9	33.1%	35.1%	24.1%	5.6%	2.2%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.7	24.0%	34.3%	34.8%	4.7%	2.2%	8
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.4	20.2%	27.2%	32.3%	14.9%	5.4%	5
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.9	44.5%	22.7%	16.7%	8.6%	7.5%	10
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.5	21.1%	26.3%	35.3%	11.0%	6.2%	1
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.8	31.9%	29.9%	28.1%	6.5%	3.6%	6
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	31.8%	31.4%	28.4%	5.7%	2.6%	2
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	49.5%	26.1%	18.8%	3.3%	2.3%	4
III	12 授業全体についてよく理解できた	3.5	18.7%	34.5%	32.3%	9.7%	4.8%	14
	13 授業の内容に興味をもてた	3.4	21.0%	28.5%	31.6%	11.0%	8.0%	15

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.7	29.6%	27.8%	30.1%	6.3%	6.1%	131



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

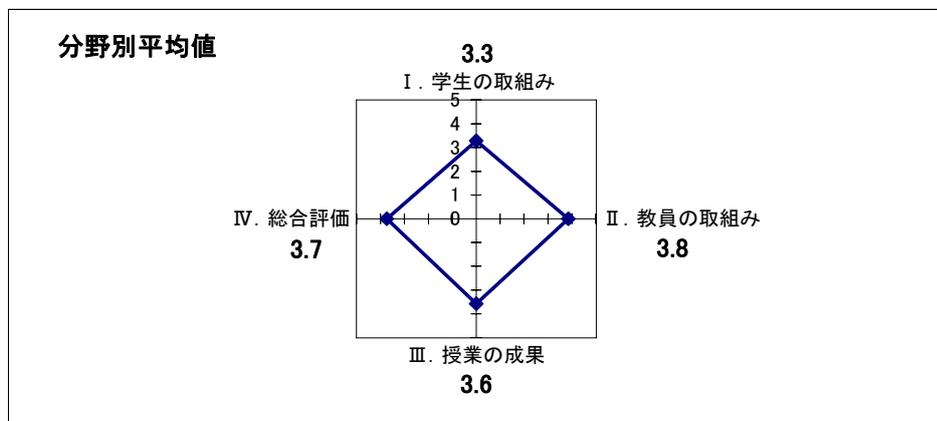
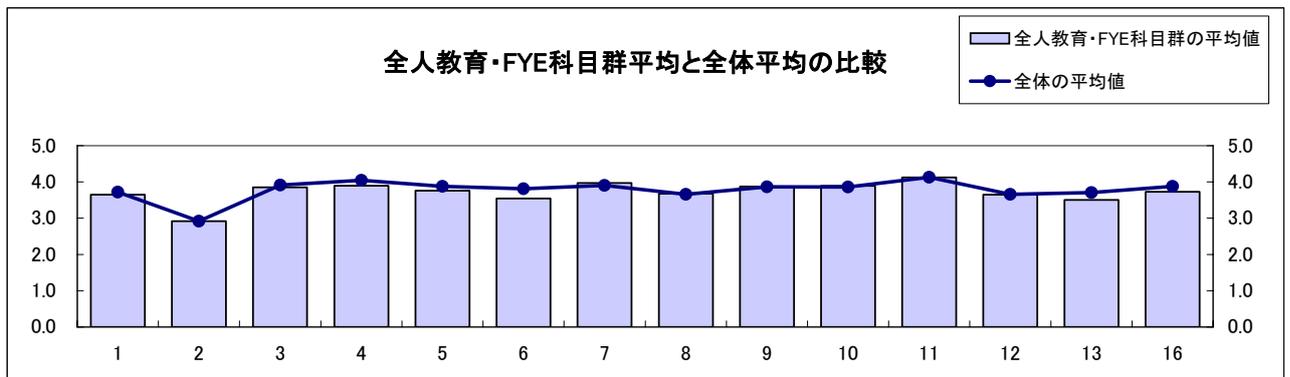
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 3083

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.6	17.1%	43.1%	29.9%	7.3%	2.6%	4
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	7.8%	20.2%	39.2%	21.2%	11.5%	6
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	29.4%	35.9%	27.1%	5.6%	2.0%	7
	4 毎回よく授業の準備がされていた	3.9	31.4%	35.7%	25.7%	5.4%	1.7%	5
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.8	25.6%	34.1%	32.8%	5.5%	2.0%	12
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.5	22.7%	29.4%	31.7%	12.2%	4.0%	10
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	43.3%	26.8%	18.2%	7.2%	4.5%	20
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.7	27.3%	29.2%	31.3%	8.4%	3.8%	5
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	32.8%	31.8%	27.6%	5.3%	2.4%	12
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	32.5%	32.8%	27.8%	5.0%	1.9%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	44.9%	29.4%	20.6%	3.5%	1.7%	7
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.6	21.4%	36.8%	30.5%	7.9%	3.4%
13 授業の内容に興味をもてた		3.5	21.3%	30.4%	31.7%	10.2%	6.4%	29

総合評価		平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.7	29.9%	29.5%	29.0%	6.5%	5.0%	301



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

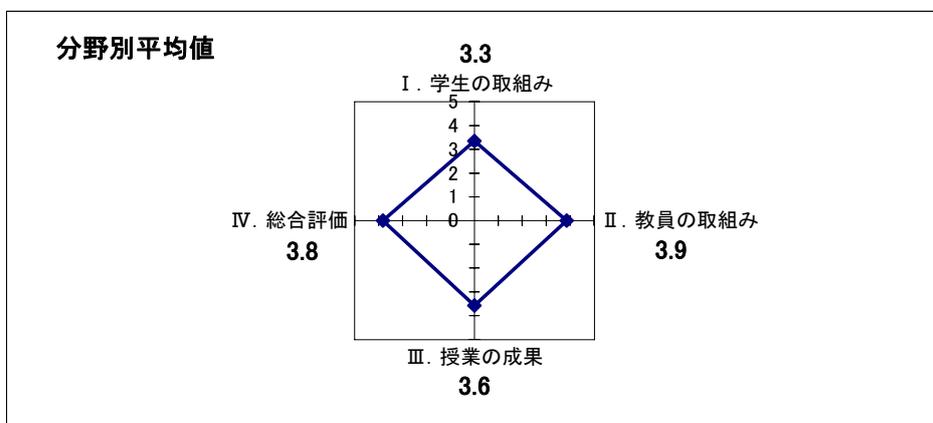
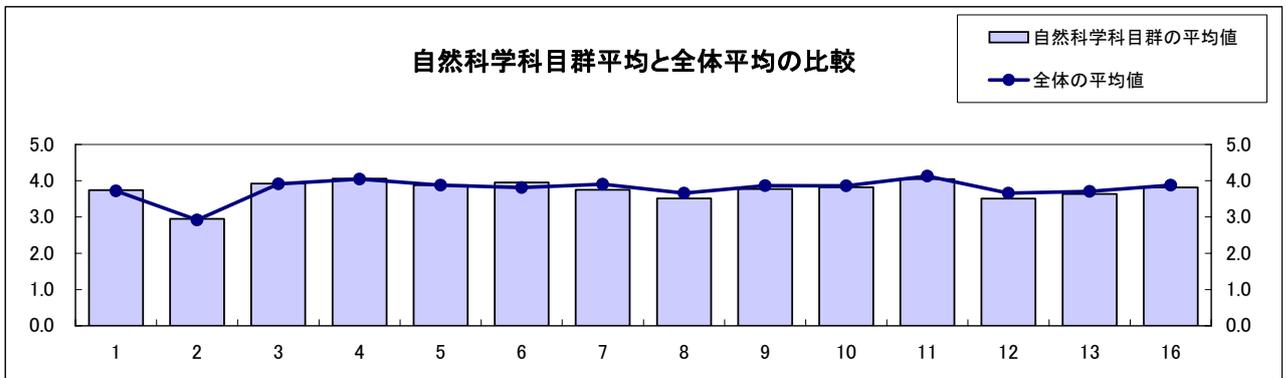
玉川大学

コア科目 自然科学科目群

回答数(全体): 3348

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	21.9%	41.6%	27.2%	7.5%	1.8%	8
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	7.8%	20.5%	39.6%	22.4%	9.6%	9
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	32.9%	37.9%	19.8%	7.1%	2.3%	10
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	41.1%	32.2%	20.2%	4.5%	2.0%	10
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	32.1%	33.0%	27.3%	5.3%	2.2%	13
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	38.8%	30.8%	19.8%	7.6%	2.9%	14
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	3.8	34.5%	29.4%	19.2%	10.2%	6.6%	11
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.5	24.7%	25.8%	31.4%	12.4%	5.8%	12
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.8	28.9%	33.0%	27.6%	7.6%	2.9%	15
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.8	32.1%	31.8%	25.5%	7.6%	3.0%	13
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.0	40.8%	31.4%	21.4%	4.4%	2.0%	14
III	12 授業全体についてよく理解できた	3.5	20.3%	33.9%	27.6%	12.3%	5.8%	27
	13 授業の内容に興味をもてた	3.6	27.8%	30.5%	25.4%	10.2%	6.1%	32

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	34.9%	30.4%	21.7%	7.6%	5.4%	495



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

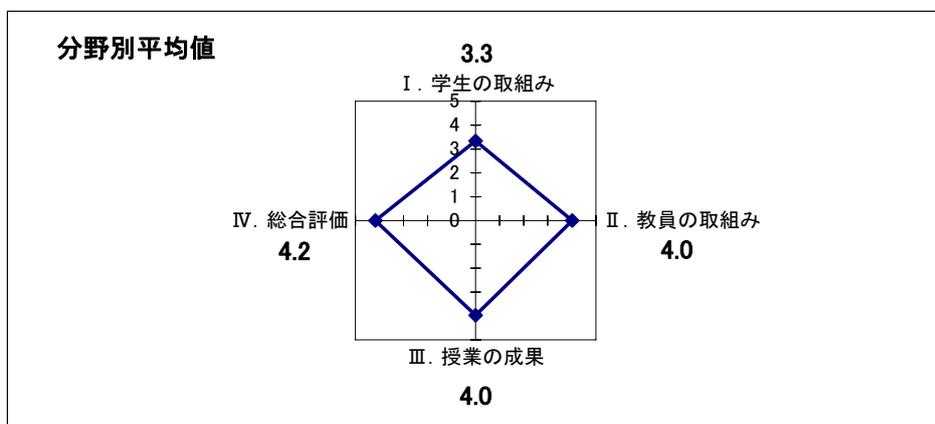
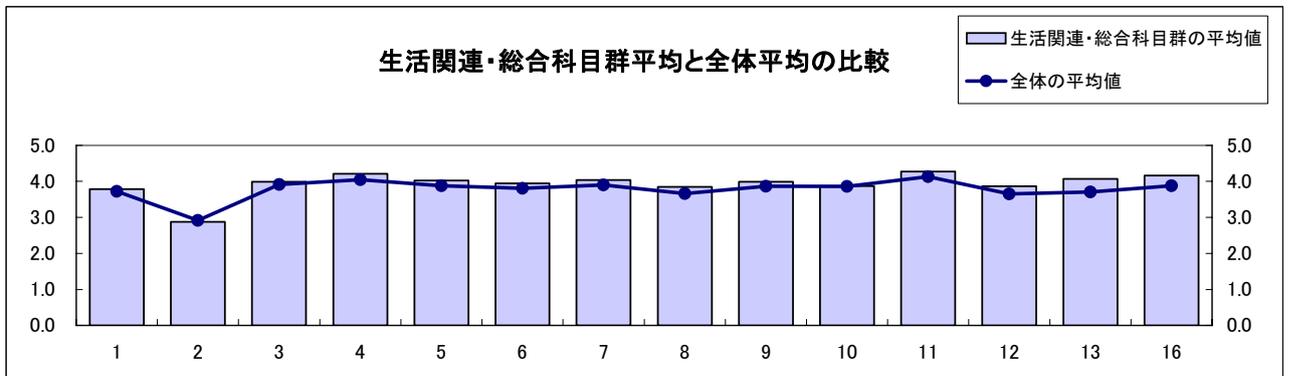
玉川大学

コア科目 生活関連・総合科目群

回答数(全体): 2339

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.5%	42.9%	26.3%	7.1%	1.2%	3
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	8.0%	16.7%	40.7%	24.4%	10.2%	2
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	33.3%	38.5%	22.7%	5.0%	0.6%	5
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	44.3%	35.2%	18.0%	2.1%	0.3%	5
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	34.7%	37.0%	25.4%	2.3%	0.6%	12
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	36.2%	31.4%	24.9%	6.0%	1.5%	8
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	43.1%	28.1%	20.1%	6.7%	2.0%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	35.0%	27.3%	27.0%	8.3%	2.4%	5
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	37.3%	32.0%	24.4%	5.0%	1.3%	4
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	32.0%	32.3%	27.6%	6.5%	1.5%	8
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	51.0%	28.4%	17.9%	2.1%	0.6%	7
	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	31.1%	35.6%	24.4%	6.8%	2.1%	10
	13 授業の内容に興味をもてた	4.1	43.7%	29.4%	19.3%	5.5%	2.2%	10

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	47.5%	29.0%	17.5%	4.7%	1.3%	308



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

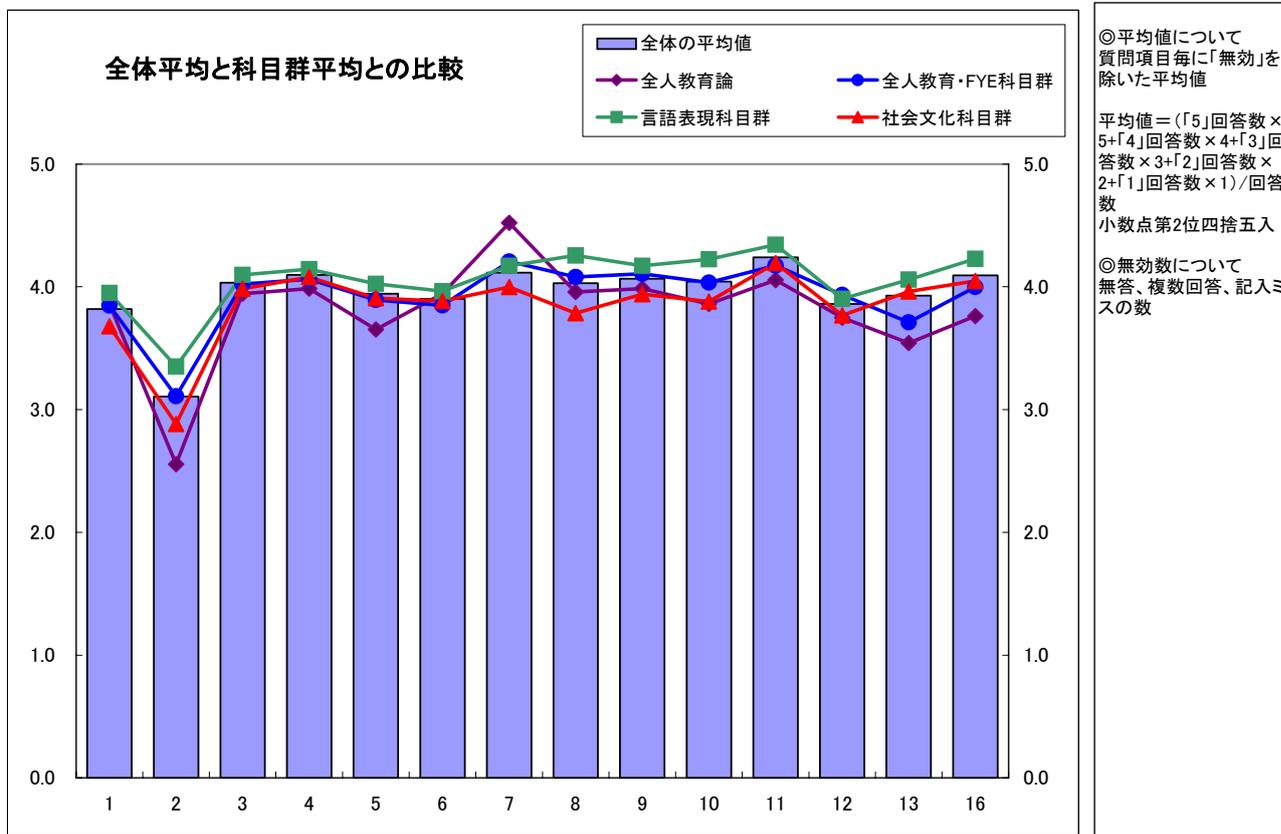
玉川大学

コア科目全体

回答数(全体): 6653

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	22.1%	45.6%	25.7%	5.3%	1.3%	8
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	10.2%	24.0%	39.1%	19.8%	7.0%	12
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	34.7%	39.4%	21.3%	3.9%	0.8%	10
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	38.2%	37.4%	21.1%	2.6%	0.7%	8
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	32.1%	35.8%	27.5%	3.7%	0.9%	20
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	31.7%	35.0%	26.3%	5.7%	1.3%	31
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	44.7%	30.0%	18.6%	5.4%	1.3%	18
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.0	39.6%	30.9%	23.6%	4.5%	1.4%	21
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	39.2%	34.0%	22.0%	3.6%	1.1%	13
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	38.5%	33.1%	23.2%	4.1%	0.9%	16
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	48.4%	30.7%	18.0%	2.2%	0.7%	21
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	27.9%	39.6%	24.9%	5.8%	1.8%
13 授業の内容に興味をもてた	3.9	35.0%	33.9%	22.7%	5.7%	2.8%	54	

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	43.1%	31.4%	19.3%	4.0%	2.2%	694



平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

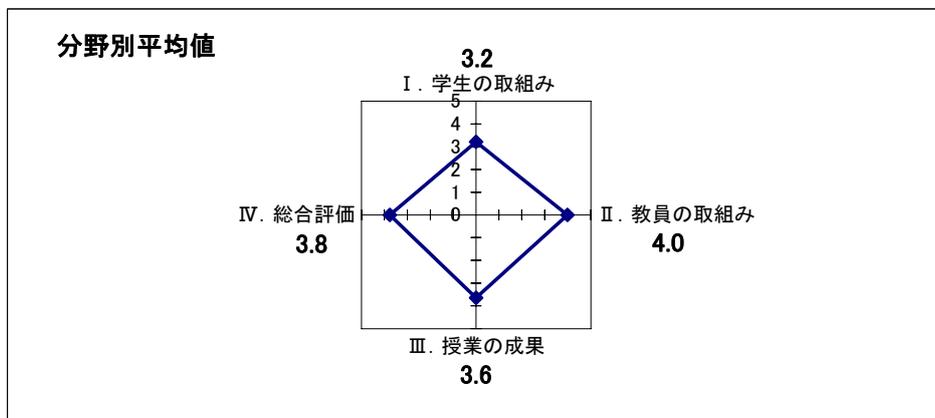
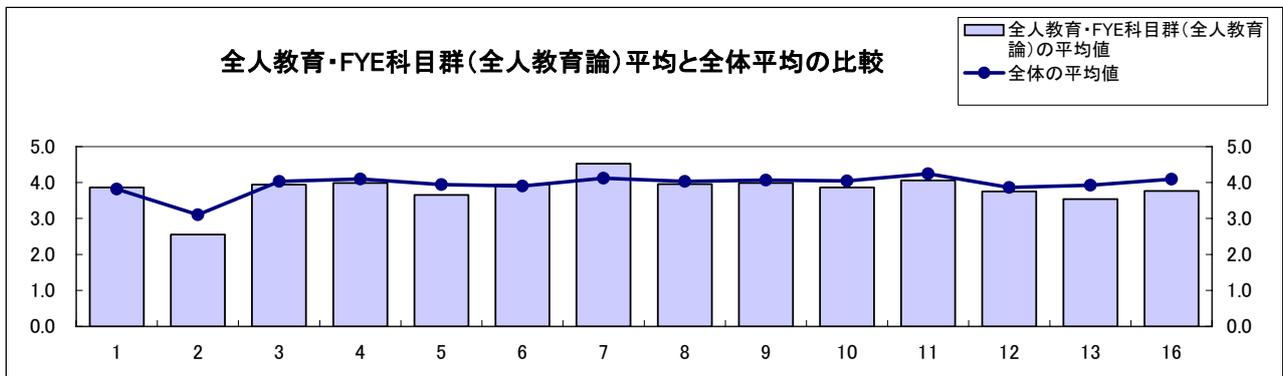
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群 全人教育論

回答数(全体): 72

分野	設問	平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	27.8%	34.7%	34.7%	1.4%	1.4%	0
	2 授業以外によく予習復習した	2.6	15.3%	6.9%	27.8%	18.1%	31.9%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	3.9	27.8%	41.7%	27.8%	2.8%	0.0%	0
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.0	31.9%	34.7%	33.3%	0.0%	0.0%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.7	20.8%	29.2%	44.4%	5.6%	0.0%	0
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	38.9%	26.4%	25.0%	9.7%	0.0%	0
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.5	62.0%	28.2%	9.9%	0.0%	0.0%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.0	31.9%	31.9%	36.1%	0.0%	0.0%	0
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.0	31.9%	40.3%	22.2%	5.6%	0.0%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	30.6%	33.3%	27.8%	8.3%	0.0%	0
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.1	37.5%	33.3%	26.4%	2.8%	0.0%	0
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	27.8%	30.6%	30.6%	11.1%	0.0%
13 授業の内容に興味をもてた		3.5	29.2%	22.2%	31.9%	6.9%	9.7%	0

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	3.8	33.3%	22.2%	36.5%	3.2%	4.8%	9



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

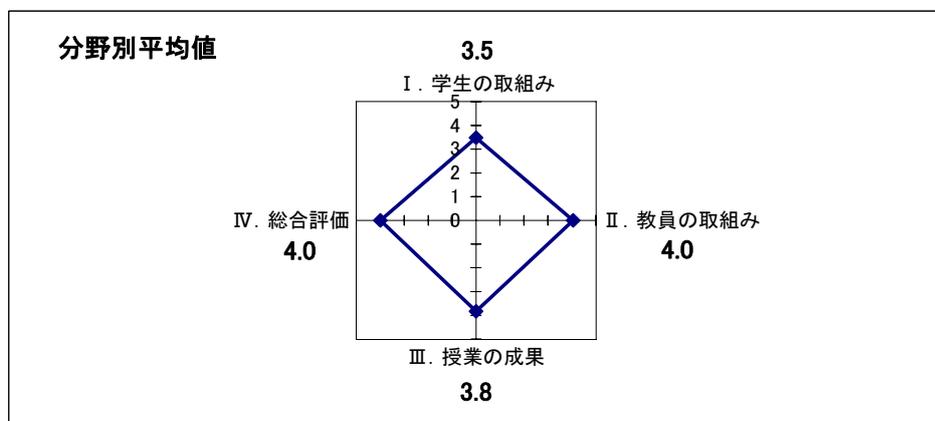
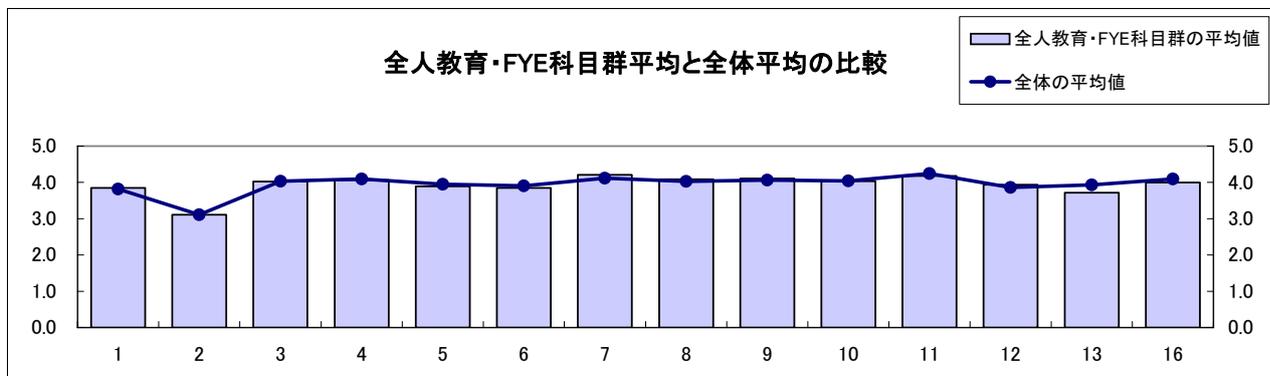
玉川大学

コア科目 全人教育・FYE科目群

回答数(全体): 1799

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.8	25.1%	43.5%	24.2%	5.6%	1.7%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.1	11.5%	22.9%	38.4%	19.1%	8.0%	4
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	35.1%	37.5%	23.0%	3.4%	1.0%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.3%	35.8%	23.8%	2.3%	0.8%	4
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	31.9%	33.9%	27.5%	5.2%	1.5%	4
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.8	29.1%	35.1%	28.6%	5.9%	1.2%	12
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	47.4%	30.7%	18.0%	3.1%	0.8%	6
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.1	40.3%	32.2%	23.6%	3.2%	0.7%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.1	39.9%	34.9%	21.7%	2.8%	0.7%	4
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.0	37.8%	32.6%	25.8%	3.0%	0.9%	3
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	45.4%	30.8%	20.5%	2.3%	0.9%	8
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	30.6%	39.5%	24.3%	4.3%	1.4%
13 授業の内容に興味をもてた		3.7	27.1%	32.6%	28.4%	8.1%	3.8%	7

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	40.3%	29.9%	22.1%	4.5%	3.1%	38



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

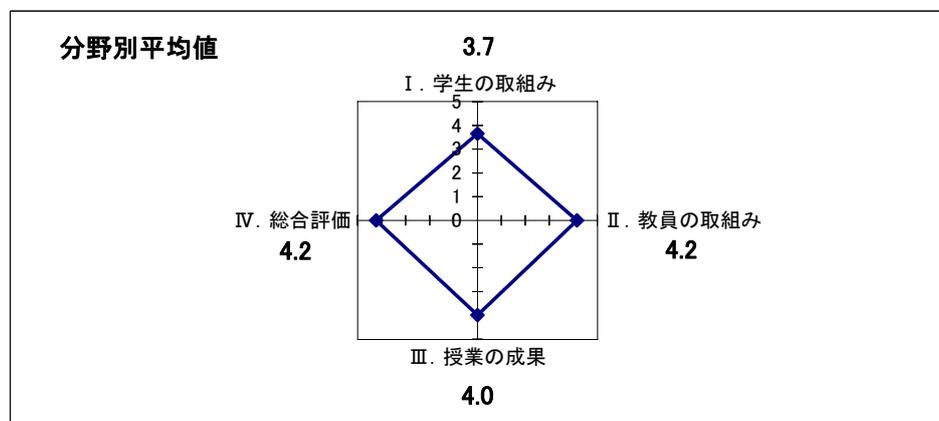
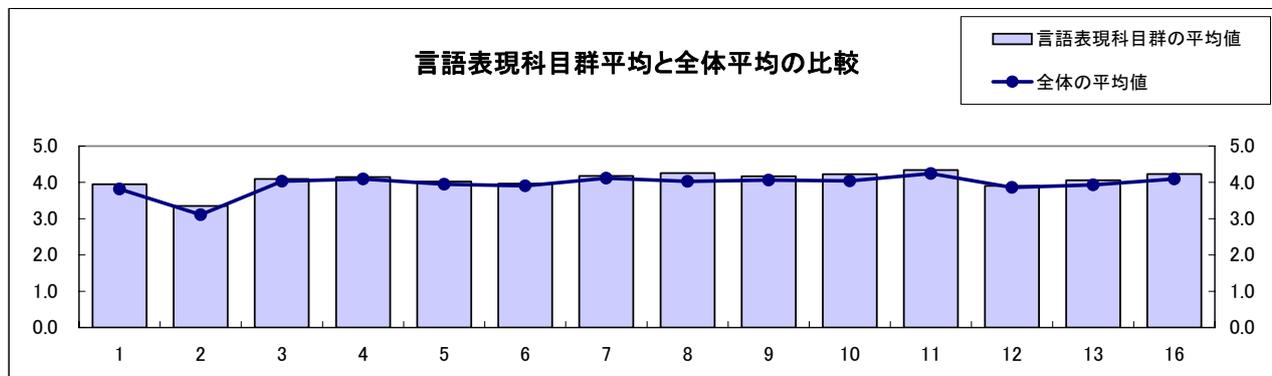
玉川大学

コア科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2316

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.2%	47.3%	22.3%	3.5%	0.6%	2
	2 授業以外によく予復習した	3.4	13.1%	31.1%	36.7%	15.9%	3.2%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.6%	40.4%	19.4%	3.2%	0.3%	2
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	40.3%	37.1%	19.5%	2.8%	0.3%	1
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	35.0%	36.2%	25.6%	2.8%	0.5%	7
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	34.2%	35.0%	24.8%	4.9%	1.0%	10
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	47.7%	29.2%	16.9%	5.0%	1.2%	3
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.3	49.1%	31.2%	16.7%	2.2%	0.8%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	45.0%	32.5%	18.2%	3.4%	1.0%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	46.9%	32.9%	16.5%	3.2%	0.5%	6
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	53.6%	29.6%	14.9%	1.6%	0.4%	5
	III	12 授業全体についてよく理解できた	3.9	30.1%	39.5%	22.9%	5.9%	1.7%
13 授業の内容に興味をもてた		4.1	40.0%	33.7%	20.4%	3.9%	2.0%	22

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	49.4%	30.0%	16.2%	2.9%	1.5%	330



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

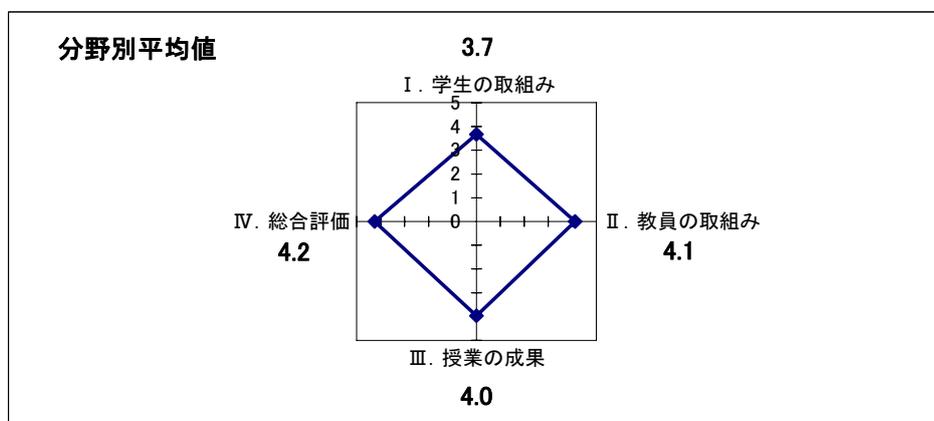
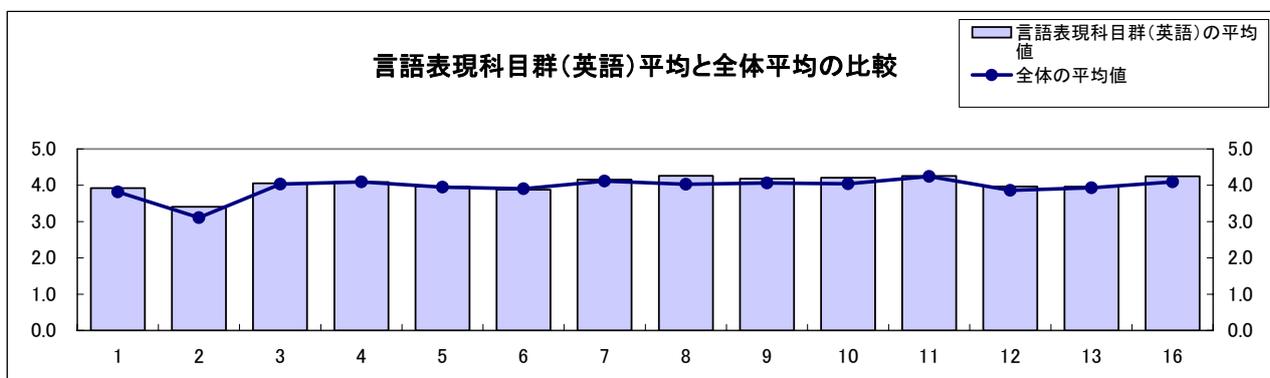
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語

回答数(全体): 884

分野	設問	平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	26.3%	45.0%	23.8%	4.3%	0.6%	2
	2 授業以外によく予習復習した	3.4	16.0%	30.0%	35.6%	15.1%	3.3%	3
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	33.4%	41.8%	21.6%	3.1%	0.1%	1
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	37.1%	37.1%	23.2%	2.3%	0.2%	1
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	33.1%	34.3%	28.8%	3.1%	0.7%	3
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	30.8%	34.5%	27.6%	5.9%	1.1%	5
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.2	45.1%	31.4%	18.4%	4.4%	0.7%	2
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.3	48.9%	30.8%	18.4%	1.4%	0.6%	2
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	43.5%	33.6%	20.4%	2.2%	0.3%	2
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	44.5%	34.4%	18.0%	3.0%	0.1%	4
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.3	47.3%	32.7%	18.5%	1.1%	0.3%	1
III	12 授業全体についてよく理解できた	4.0	31.4%	39.7%	23.7%	4.1%	1.0%	11
	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	35.2%	33.0%	26.2%	3.9%	1.7%	11

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.2	50.5%	27.5%	19.3%	2.1%	0.7%	163



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

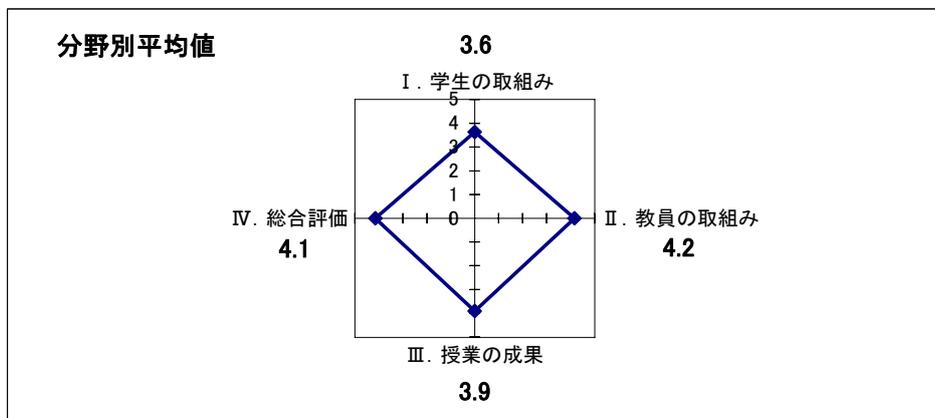
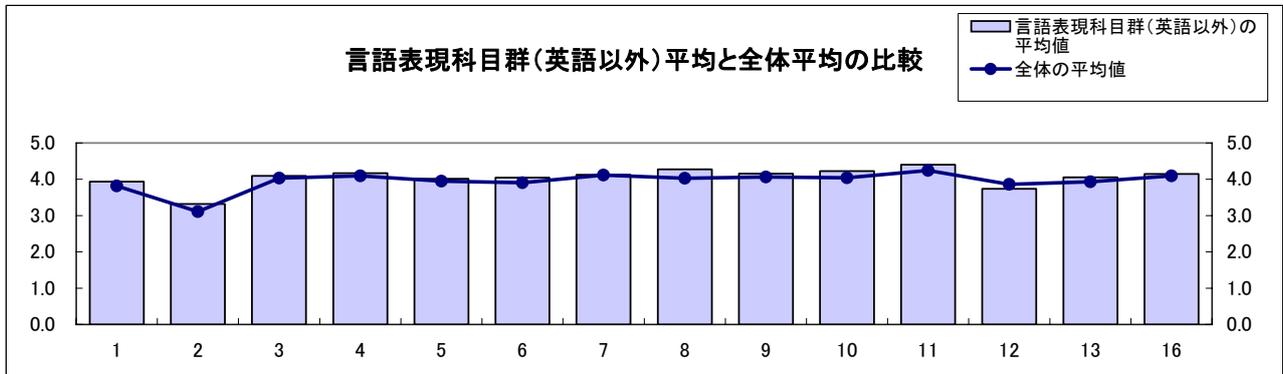
玉川大学

コア科目 言語表現科目群 英語以外

回答数(全体): 922

分野	設問	平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.9	24.9%	48.5%	22.6%	3.4%	0.7%	0
	2 授業以外によく予習復習した	3.3	11.1%	32.4%	36.2%	17.8%	2.5%	0
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.1	36.2%	41.8%	17.8%	3.7%	0.5%	0
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.2	41.0%	38.9%	16.5%	3.3%	0.3%	0
	5 シラバスにそって授業が行われた	4.0	33.0%	39.1%	24.7%	2.7%	0.4%	2
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	4.0	37.6%	36.1%	20.7%	4.5%	1.1%	3
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.1	47.9%	27.4%	16.3%	6.3%	2.2%	1
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	4.3	51.0%	30.9%	13.4%	3.6%	1.1%	1
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	4.2	46.0%	31.5%	16.3%	4.7%	1.6%	0
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	4.2	48.5%	30.3%	16.7%	3.7%	0.8%	1
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.4	59.2%	25.2%	12.8%	2.3%	0.4%	3
III	12 授業全体についてよく理解できた	3.7	24.0%	39.9%	24.7%	8.8%	2.6%	2
	13 授業の内容に興味をもてた	4.1	39.4%	36.2%	17.2%	4.7%	2.5%	4

総合評価		平均値	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無効回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.1	46.2%	31.8%	14.9%	4.5%	2.6%	99



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

平成19年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

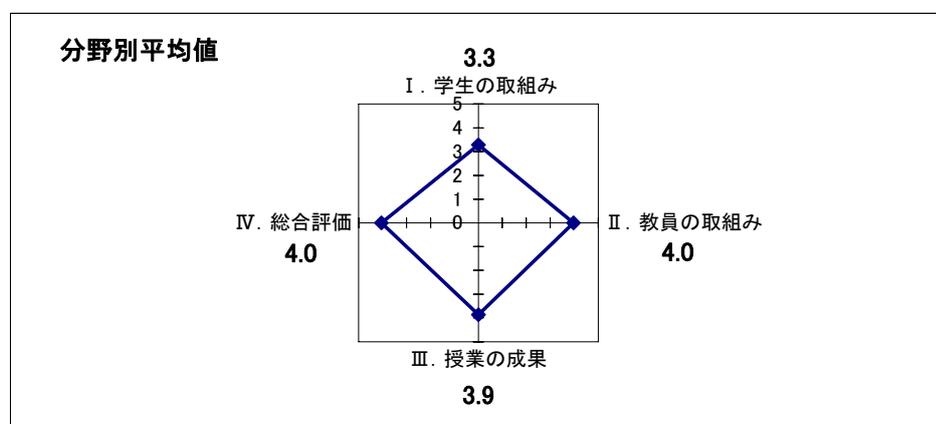
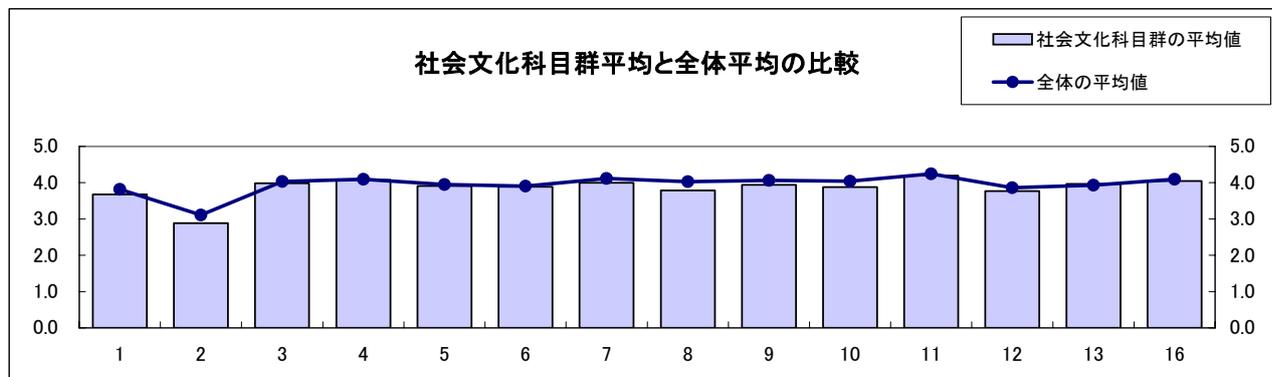
玉川大学

コア科目 社会文化科目群

回答数(全体): 2538

分野	設 問	平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 授業には意欲的に取り組んだ	3.7	16.2%	45.7%	29.8%	6.7%	1.7%	4
	2 授業以外によく予習復習した	2.9	6.7%	18.2%	41.7%	23.8%	9.7%	5
II	3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	4.0	32.8%	39.7%	21.7%	4.7%	1.0%	4
	4 毎回よく授業の準備がされていた	4.1	36.8%	38.8%	20.7%	2.7%	0.9%	3
	5 シラバスにそって授業が行われた	3.9	29.6%	36.8%	29.3%	3.5%	0.8%	9
	6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	3.9	31.4%	34.8%	26.1%	6.2%	1.5%	9
	7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	4.0	40.2%	30.2%	20.5%	7.5%	1.6%	9
	8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	3.8	30.5%	29.8%	29.8%	7.5%	2.4%	7
	9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	3.9	33.5%	34.8%	25.6%	4.4%	1.7%	7
	10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	3.9	31.4%	33.7%	27.7%	5.8%	1.4%	7
	11 教員は毎回熱意をもって授業をした	4.2	45.9%	31.7%	19.1%	2.5%	0.8%	8
III	12 授業全体についてよく理解できた	3.8	24.1%	39.8%	27.1%	6.9%	2.1%	22
	13 授業の内容に興味をもてた	4.0	36.1%	34.9%	20.7%	5.5%	2.7%	25

総合評価		平均値	強くそう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	16 この授業を受講してよかったと思う	4.0	39.8%	33.8%	19.8%	4.6%	2.0%	326



◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数
小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数

参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事要旨

第 1 回大学 FD 委員会議事要旨

日 時：平成 19 年 6 月 5 日（火） 17:00～18:30

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委員） 茅島路子、河野 均、山田博三、高千穂安長、金井茂夫、
加藤悦子、小嶋正敏、菊池重雄、江里口歡人

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、山崎千鶴、柳原達宏

欠席者：（アブバイター） 切田節子

* 敬称略

議 案：（1）平成 18 年度 FD 活動報告書に関する件
（2）大学基準協会による認証評価結果に関する件
（3）「大学 FD 研修の開催に関する調査」に関する件
（4）特別講演会開催に関する件
（5）コア科目 学生による授業評価アンケートに関する件
（6）平成 19 年度プレゼンテーション研修に関する件

報 告：（1）山形大学教養教育 FD 合宿セミナーについて

議事要旨：

（1）平成 18 年度 FD 活動報告書に関する件

（2）大学基準協会による認証評価結果に関する件

高橋靖直委員長より、本報告書は各学部からの報告をもとにまとめたもので、絹川正吉教授の講演録も収録されている、これが今年度の FD 活動の土台になっていくものと考えたとの旨を説明。

この説明に引き続き、新任の FD 委員（茅島路子委員・高千穂安長委員・加藤悦子委員・江里口委員歡人）ならびに事務担当の山崎千鶴課長を紹介。

次に、茂村課長より、報告書の 4 ページから 10 ページに大学認証評価の抜粋と各学部への助言やテーマが記載されている旨を報告（認証評価に関する全文は別途、会議資料として添付）。

菊池委員より、43 ページの 1 行目、「3.Blackboard@Tamagawa の活用」の最初のナンバー3 を 4 に訂正する必要がある旨を説明。

高橋委員長より、5年後に次の認証評価があり、その1～1年半前より評価準備を開始する、そして次回は今回評価されたものがその後どうなったかが問われる旨を説明。

(3) 「大学 FD 研修の開催に関する調査」に関する件

柳原課長より資料に基づいて説明。本件については、委員から次のような意見が述べられた。

- ・質問項目はランダムでもよいが、FD で何を学んだらよいのかが分らない。各項目についての説明も必要かもしれない。
- ・何をやるかを先生方に聞いて実施するのはおかしい。やることは決まっていると考える。
- ・何が必要かは、教員に聞いてみないとわからない。現状を知る必要がある。
- ・取捨選択をする際に我々が考える必要があるのは、「何かここに加えることがないか」と「何かこの中から除いてもよいものがあるか」である。
- ・この調査用紙の例を見て、先生方は、大学があげる FD とはこういうものだと半ば示しているように感じるかもしれない。それゆえ、項目の記載については十分な検討が必要である。項目として、「学生のキャリア教育に関する関わり方」なども入れる必要があると感じる。

本件については、検討の結果、アンケートの加除項目を委員の方々から出していただき、まとめ直し、冒頭部分に FD 活動の趣旨や過去の実施研修の記述を加えて作り直すこととなった。

(4) 特別講演会開催に関する件

江里口委員より、資料に基づいて説明。

検討の結果、入試広報部と研修センターの共催によるこの特別講演会は、大学教員にとっては参加が難しい時間帯の開催でもあるため、FD 研修とは位置づけず、関心のある先生方に呼びかけることとなった。

(5) コア科目 学生による授業評価アンケートに関する件

山崎課長より、今年度のコア科目授業評価アンケート実施について、資料に基づいて説明。了承された。

(6) 平成 19 年度プレゼンテーション研修に関する件

茂村課長より、資料に基づいて説明。

本研修の開催にあたり、6 月末日までに各学部の参加者を教務課にお知らせいただきたい旨が述べられた。

報告要旨：

(1) 山形大学教養教育 FD 合宿セミナーについて

茂村課長より、資料に基づいて説明。

本研修は、切田アドバイザーからの薦めもあった研修であり、日程が合うならばぜひ参加いただきたいとの旨が述べられた。

また、こういう機会に学部の FD 予算を使っていただくことは特別補助金の申請対象にもなり、玉川大学の FD を盛んにすることにもつながることが申し添えられた。

以 上

第 2 回大学 FD 委員会議事要旨

日 時：平成 19 年 12 月 17 日（月） 17:15～18:30

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委員） 茅島路子、河野 均、山田博三、高千穂安長、金井茂夫、
加藤悦子、小嶋正敏、江里口歡人

（アドバイザー） 切田節子

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、柳原達宏、（伊従記章）

欠席者：（委員） 菊池重雄

（事務担当） 山崎千鶴

* 敬称略

議 案：（1）大学設置基準等の一部改正に関する件
（2）平成 20 年度採用の教員研修に関する件
（3）平成 19 年度 FD 活動報告書作成に関する件
（4）FD アンケートに関する件

報 告：（1）他大学の FD 活動について
（2）授業参観について

議事要旨：

（1）大学設置基準等の一部改正に関する件

茂村課長より、資料に基づいて説明。平成 20 年度に向かうにあたり、各学部・学科における人材養成の目的を定めよということになった。本学においてはすでに、資料の 9 ページの記述のように行われている。シラバスや成績評価基準の明記などのこともあり、FD 活動にお役立ていただきたい。

さらに本件について、高橋委員長より、資料 10 ページからの学則改正に関する内容は文科省の省令改訂によるもので、学部や学科の会議ですでに出たところもあるかもしれないが、学部長の責任で定めた部分もあろうかと思われるので、内容について疑問がある場合はご指摘いただきたい旨が述べられた。

（2）平成 20 年度採用の教員研修に関する件

茂村課長および柳原課長より、資料 15 ページに基づいて説明。本件については、原案のとおり実施することとなった。

- ・2 月 20・21 日の両日に、大学 8 号館 123 教室において開催。対象者は 20 名ほど。
- ・新任教員にはさまざまなバックグラウンドの方がいるが、この研修では玉川の教職員の一員として最小限必要なことを取り上げていく。

(3) 平成 19 年度 FD 活動報告書作成に関する件

茂村課長より、その内容と今後の予定、担当等について、資料に基づいて説明。あわせて、各学部で計上している FD 活動推進のための予算の年度内執行についても依頼（文科省の補助金対象項目でもあるため）。

本件について高橋委員長より、資料 19 ページにある、われわれが取り組んでいる FD 活動をどのように活かしているかというところが文科省の評価の視点になってきている、特に 3) の「教員相互の授業参観の組織的な取り組み」は文科省が評価しているポイントである、開かれた授業というスタンスで、自分の専門領域以外についてコメントすることに躊躇する意見のある一方、専門外の授業について意見するのもそれはまたそれでよいのではとの意見もある、銃牛を中心としたティーチングの評価は研究業績と同じく重要な要素として資格審査に必要なポイントであるとの旨が述べられた。

(4) FD アンケートに関する件

柳原課長より、資料に基づいて説明。本件については、原案に沿って実施することとなった。また、この調査の結果は次回の FD 委員会において報告することとなった。

報告要旨：

(1) 他大学の他大学の FD 活動について

(2) 授業参観について

大野課長より、立命館大学の FD 活動などについて、資料に基づいて報告。また、茂村課長からは 12 月の第 2 回 FD セミナー、小嶋委員からは 9 月に開催された大学教員セミナーについて報告があった。

最後に高橋委員長より、先生方にはご専門の一方で FD 活動していただいている、これは大学への貢献だが、身近に言うならご自身の日常にどう反映し生かされるかだと思ふ、世は FD 活動花ざかりの感があり、よくそんなに時間があると思ふ、先生方は教育と学生指導に時間をとられ、FD に入っていくのに恐れを感じているのではないか、FD の形だけを追うと形骸化するだけで力にならないと考える、との旨が述べられた。

以 上

第3回大学FD委員会議事要旨

日 時：平成20年3月11日（火） 15:30～17:45

場 所：教学事務棟 150・151 会議室

出席者：（委員長） 高橋靖直

（委員） 茅島路子、河野 均、山田博三、高千穂安長、金井茂夫、
加藤悦子、小嶋正敏

（事務担当） 茂村恭司、大野太郎、柳原達宏、（伊従記章）

欠席者：（委員） 菊池重雄、江里口歡人

（アドバイザー） 切田節子

（事務担当） 山崎千鶴

* 敬称略

議 案：（1）平成19年度FD活動を振り返って

（2）平成19年度FD活動報告書作成状況に関する件

報 告：（1）FDアンケートについて

（2）他大学のFD活動について

（3）FDフォーラム参加報告について

議事要旨：

（1）平成19年度FD活動を振り返って

<経営学部>：高千穂委員

今年度は、春に3回、秋に3回のFD会議を開催した。春の3回は、学生による授業評価を役立つものにするためのものである。また、秋学期の3回のうち2回は現行のアンケートについて、1回は代々木ゼミナールの講師による教員研修であった。

アンケートについては、それを実施して実態はわかるが、残念ながら水準の向上には結びつくところまではいかなかった。

<芸術学部>：加藤委員

学生の基礎学力を上げることを目的に、アウト・スタンダード・テストを継続実施している。

教員相互の授業内容向上の組織的取り組みとして、実技系教員の共同授業を、学科ごとに特定の科目において実施した（始業前に、プログラムのコンセプト作りをするなど）。来年、エグジビションなどで、Blackboardの活用なども考えている。

<文学部>：茅島委員

比較文化学科では、学生の授業アンケート評価をした。

人間学科では、各教員が自分の授業についてのフィードバックを得ている。

また、1年時セミナーでは3人の教員が協同で、互いの得意分野を担当しながら授業改善・デザインをした。

<農学部>：河野委員

主任の先生方が春と秋に各2～3回委員会を実施した。授業評価アンケートを今後どうするかについて検討中である。今年は、教員相互の授業参観をと考えている。

<リベラルアーツ学部>：小嶋委員

1年の締めくくりとして、2月21日にFD研修会を実施した。当日は、文部科学省から講演者を招き、大学の入口と出口の間でどのように教育を進めていくかについて話してもらった。

<工学部>：山田委員

クオリティ・マネジメントの企画であるISO9000の維持がFDの大きな柱であった。そのために、授業評価アンケートを実施し、授業チェックシートを活用し、学課の授業評価検討会で検討したものを学部の会議に提出した。マニュアルが学科単位でできており、学部で運用するには実情に合わない。維持するのに手間がかかるというのがFDの課題である。

研究授業はやってはみたが、教員の意識が変わるとい点では有効であると感じている。それを次にどう生かすかについては検討中である。

<教育学部>：金井委員

組織的活動はできていない。

アンケートについては昨年2月の教授会で、アンケートを業者に集計してもらって活用するという方向を検討したが、反対がありまだ実現していない。春と秋に教育活動報告書で学部長に報告することになっており、その中に教員の授業のアンケート結果を載せる予定である。

FD活動については、主任会が中心となって進めているが、教職員全体が取り組まなければ意味がないのでその仕組みを作ってほしいと提案している。

1年生のFYE担当の先生は負担が大きい状況があるので、ピア・メンター（アシスタント）のような立場の人を設けられるとよいかと考えている。また、1・2年生の担任の集まりを行っている。

各学部の報告の後の意見については、以下のとおり。

工学部では、教務担当者会がFDを進めているが、担当の先生方にはかなりオーバーワークになっているという印象を受けている。

学生による授業評価をとるまではよい。問題はそれをいかに教員の研修に結びつけるかである。改善につながった具体例の一つだが、評価の低い科目があってそれを改善するという時に、科目や担当者のせいだと断定できないケースがあった。そして、

クラスのサイズ（受講者数）を半分にすることで改善された。教務委員会でよく取り上げられているのは授業人数規模のこと。こうしたことも、FD サポートのひとつの形である。

かつて、海外で「学生による授業評価とその活用」をテーマに研修した際、学生の授業評価をする専門のセクションがあって専門家がいるということが驚きだった。評価の分野によって違った調査項目が用意されていて、それを教員の評価に使うということではなかった。専門の職員が先生の授業を見学し、改善点や問題点を整理して先生に提示する。それにより、先生は同僚から指摘されるよりも素直に話を聞けるということである。その後、指摘のあった点について達成期限を提示し、改善を図っている。

改善策の一つとして、外部の研修に出てもらったりもしているそうだが、1～2年の間に改善されない場合には大学を辞めてもらうこともあるとのこと。

今後、誰がどのように教育の質の保証をするのかということが言われている。継続的に FD として工夫して目的にあった評価をするにはどうすればよいか、各学部で工夫する必要がある。

授業評価についてのひとつの結果であるが、受講者数 30 名以下の授業では評価が高くなる。また、文系よりも理系の方が評価は高い。さらに、教員の年齢が高くなるにつれて評価が低くなる。全体に若い教員の方が優しく丁寧。一方、年齢の高い教員の方が難しい＝意味のわかりにくい言葉を使うので、これが原因とも理解できる。

大学院の FD 委員会で、複数の学生と教員でひとつのプロジェクトを進めるという話が出た。FD も教員一人ひとりではなく先生方が一緒に取り組むことが大切ではないかと思う。

リベラルアーツ学部では、卒研をプロジェクトと呼んでいるが、ここでは違う分野の 3 人の先生方が協同して指導していくとか、食堂に一堂に会してポスターセッションをするなどしている。

人間学科では 3 人の先生が協力して授業をデザインしている。レポートの質を改善したいというのが目的だが、春学期の授業に反省を加えた内容を秋学期に実施し、そのアウトプットを纏めてみているところである。結果では確実に授業がよくなっていて、3 人で取り組むので教員一人当たりの負担も減っている。

個々で授業をする時も、3 人で相談している。教員の負担感が減って知恵も交流できる。1 年生へのインタビューでは、受けた中で一番よい授業という評価をもらった。人と関わる中で学ぶという体験が大事だと考えるが、それは学生だけでなく先生にも

言えることである。

既存の担当コマ数の枠組みにチームでやる授業がどう受け入れうるかについては、事務の人たちに考えていただきたいと思う。

1年生の担任をしたことはよい経験だと思う。そのときの礼拝の時間に、何人かの先生方は授業があつて出席できない。玉川は礼拝を大切にしているというのに先生が誰も来ないというのはどうなのか。礼拝担当の先生からの不満もある。先生も礼拝の時間を大切にしているということを示す必要がある。学部として考えるべき問題である。

芸術学部で開催したファッションショーでは、学科をまたいだ学生たちの参加があつた。こうした試みについて今後も理解いただけるとよい。

教育活動を勤務としてどのように評価するかについては、特に従来 of 枠組みがないものだとどう評価するかについて多角的に考える必要がある。特に芸術学部には、そういうケースが多い。実際は、勤務の一部としてカウントするのが難しい場合もある。

今までは、行ったあとでカウントしてほしいというケースが多いと感じている。どのように授業をやっていくかというシラバスの関係もあるので、年度のはじめに出していただきたいと先生方にはお願いしている。

(2) 平成 19 年度 FD 活動報告書作成状況に関する件

茂村課長より、作成に関する今後の予定、担当等について再確認、および、3月31日が締め切りである旨が述べられた。

報告要旨：

(1) FD アンケートについて

柳原課長より、資料に基づいて調査結果を報告。
今後、この結果を参考にして全学共通部分のFD研修を考えることとなった。

(2) 他大学のFD活動について

大野課長より、資料に基づいて報告。

(3) FD フォーラム参加報告について

柳原課長より、今年3月に京都・立命館大学で開催された第13回大学FDフォーラムについて報告（報告書別紙）。

(4) リベラルアーツ学部の FD 研修について

小嶋委員より資料に基づいて報告。本件については、非常に意欲的な試みであるため、今後、他の学部も参加出来ればとの意見があった。

以 上

参考資料 2. プレゼンテーション研修会アンケート用紙

各項目ごとにA～Eでランクをつけてください。

その際、Aは「全くそのとおり」、Eは「全くそのとおりでない」という評価です。

1. 全体についての感想をお聞かせください	A	B	C	D	E	フリーコメント
・総合的に満足されていますか						
・担当する授業に役立つと思いますか						
・ご自身のプレゼンテーション・スキルは向上したと思いますか						

2. 研修会の内容についてお聞かせください

・研修内容は適切でしたか (2日間という時間制約を考慮に入れてお答えください)						
・講師の説明は理解しやすかったですか						
・テキスト、教材、教具などは適切でしたか						

3. 研修会の運営についてお聞かせください

・2日間という日程は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・時間配分は適切ですか (不適切な場合は、フリーコメントをご記入ください)						
・開催場所、施設などは適切でしたか						
・事務手続き、連絡などは適切でしたか						

4. 今後のFD研修会についてお聞かせください

・この研修の開催を継続することに賛成ですか						
・この研修の受講を、他の人にも勧めますか						
・どんな内容の研修会を希望しますか (複数記入可)						

5. 具体的な技法について、裏面にお書きください。

6. その他の感想、コメントなどありましたら、別紙に自由にお書きください。

今後のFD研修会開催および運営の参考資料とさせていただきます。

参考資料3. 「コア科目授業評価アンケート」用紙

玉川大学 ー授業改善のためのー 【コア科目】
平成19年度 学生による授業評価アンケート

このアンケート調査は授業担当教員が学生諸君と共に、授業をより改善することを目指して実施するものです。記入に当たっては、授業の全体を視野に入れた、責任ある評価をお願いします。なお、このアンケートがあなたの成績に影響することは一切ありませんので、氏名などは記入しないでください。

記入日	年 月 日	曜日	時限	学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	-------	----	----	----	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名	(強く思う) 5 (非常に良い) 4 (良い) 3 (普通) 2 (あまり思う) 1 (良くない) 0
担当教員名	

以下の質問について、該当する番号にひとつだけ○をつけてください。

あなたの取り組み	5	4	3	2	1
1 授業には意欲的に取り組んだ	5	4	3	2	1
2 授業以外によく予習復習した	5	4	3	2	1
教員の取り組み					
3 毎回の授業が筋道を立てて説明されていた	5	4	3	2	1
4 毎回よく授業の準備がされていた	5	4	3	2	1
5 シラバスにそって授業が行われた	5	4	3	2	1
6 教材・教具・黒板・パソコン等を有効に使った	5	4	3	2	1
7 教員の声や話し方は明瞭で聞き取り易かった	5	4	3	2	1
8 授業中に学生の参加(質問・発言など)を促し、適切に対応した	5	4	3	2	1
9 教員は良い学習環境を保つよう努力した	5	4	3	2	1
10 教員は授業中重要な箇所を強調して要約した	5	4	3	2	1
11 教員は毎回熱意をもって授業をした	5	4	3	2	1
授業の成果					
12 授業全体についてよく理解できた	5	4	3	2	1
13 授業の内容に興味をもてた	5	4	3	2	1
担当教員が科目毎に設定する設問					
14	5	4	3	2	1
15	5	4	3	2	1
総合評価					
16 この授業を受講してよかったと思う	5	4	3	2	1

その他、意見、要望、感想など自由に記述してください。(裏面使用可)

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(目的)

第 1 条 玉川大学(以下「本大学」という。)教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD (ファカルティ・ディベロップメント) (以下「FD」という。)委員会(以下「本委員会」という。)を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、アドバイザー、事務担当をもって構成する。
2 前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
3 学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
4 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
5 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。
2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。
(1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
(2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
(3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
(4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
(5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
(6) 部会からの報告・審議に関する事項
(7) その他FDに関連する事項

(部会)

第 6 条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部及び教育企画部とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

平成 20 年 5 月発行

発行 玉川大学 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802 (教学部教務課)

042-739-8899 (教育企画部教育企画課)